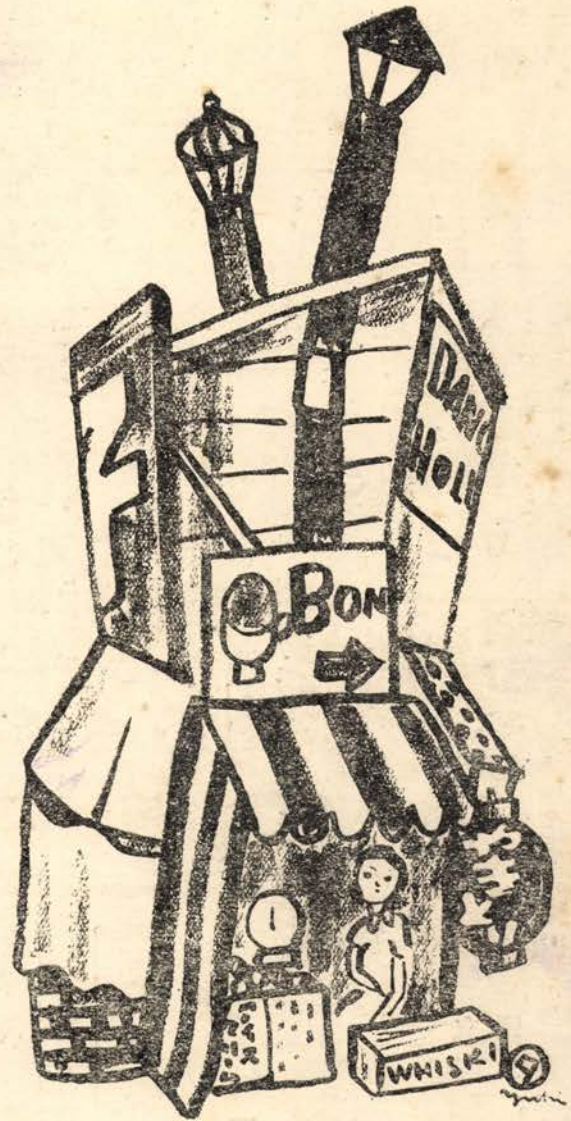


麻生路郎☆主筆

Pensoj flugas trans la land'-limon
The Senryu Zasshi

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
 創刊大正十三年・通卷二百九十号



No. 290

七月号

川

柳

の雅

証

七月号目次

題 宇……………麻生 路郎
街 角(東京新宿) 由比種三郎

新刊柳評百句

昭和の作品から(4)……………麻生 路郎(一〇)
牡丹々……………安川久留美(二六)
川柳と夏の行事を語る……………(二二)
路郎・鮎美・四郎作・幸二郎
豆秋・鏡々・古方

蓮 華……………廣瀬志津雄(二七)
小説・將軍娘(元)……………山路 閑古(二四)

川柳騒動記……………東野 大八(二五)
川柳加藤蛇の目紋(二)……………阿達 義雄(二〇)

窓口に……………麻生 路郎(二二)
詠史川柳「につぼん」10……………戸田 古方(三三)

飛燕 往 来……………(一八)
不朽洞喫煙室……………(二一)

抱逸・貴山・不朽洞主人・豆秋
晴峰・由布・南柳・鮎美・妄夢

★

不朽洞句帖……………麻生 路郎(二二)

近作 柳 檉……………麻生路郎選(二六)

川 柳……………麻生路郎選(二六)

同舟 近 詠……………諸 家(二四)

一路集「街路樹」……………福田山雨橋選(二二)

各地 柳 壇……………(二四)

不朽洞會から……………(二二)

不朽洞 会から

▼橋本綾雨氏(大阪府)は六月二日八時二十分大阪で法事のため
石川縣え備郷
された▼須崎豆秋氏は六月三日讃岐の旅から一象頭山金比羅嶽(上り)の句を寄せられた▼西森花村氏(大阪府)は六月の本社句会で六月優勝カップを把持された▼池沢樂居氏(兵庫縣)の「善意證」が實踐に移つて、「日の神」教團は全く氏が教祖のような存在たこと、目下姫路市の日の神教團の本部にあつて聖典を作つていられる▼櫻川不水氏(下関市)は五月廿一日に岡山駅の浜山久米雄氏を訪ねられた▼栗山快夢起氏(ハワイ)からの通信によると、四月廿八、九日の両日に亘りマウイ島吟行一行廿二名で、名所巡り、ハレアカラ登山、句会と忙しい旅をされた(詳細後報)▼山路閑古氏(東京都)は學界を引退され住本理學博士の住本研究所に入り、第一工場の工事進中なので其の第一線に活躍されているとのこと▼小川恒明氏(大阪府)は本社句会の夜、大室文化会館の入口にブラ下つて、提灯が破損してゐるので新調寄贈された(因みにこれまでの分は、伊部香林氏の寄贈)▼蛸子省二氏(愛媛縣)は二日外出すれば八日寝込む割合とのこと御同情申上げる「息苦し時計のとまる折りまたむ」の句信を寄せられた▼荒木哲水氏(大阪府)は阪神電鉄を五月末に退職せられた▼須崎豆秋氏は五月廿二日商用で岡山へ出張され、満年氏、久米雄氏に会い敬談されたと▼北川春集博士は國鉄を五月末退職され、六月一日から大阪市交通局病院内科医長の榮職に就任された▼浪玲之介氏(大阪府)は同好教友と毎日曜に俳句を試みていられる由▼須崎豆秋氏(大阪府)は五月九日夜大万で「自由學校」観賞坐談会を催された▼服部十九平氏(岡山縣)は川端縣廳支部に新会員を獲得するため別に女子ばかりの研究会を作り五月一日にその第一回を開催され▼佐野卜占氏(八代市)は五月二日から関西方面へ旅行された▼府生梨里さん(大阪府)の一女なる悲しみおんな酌をするの句が五月十三日夜、電光川柳で発表された▼水谷竹莊氏(大阪府)は五月十四日病院の看護婦のナイチンゲール祭の慰安劇で、外人の役に出演された▼逸見灯竿氏(岡山縣)は阿哲郡哲南中学校で榮轉された▼八竹正柳博士(大阪府)は醫學方面の多忙で四月限り退会された▼岡田紫雲氏(大阪府)は永らく臥床遂に入院されているので五月限り退会、一日も早く全快の上捲土重来されんことを祈ります▼小田垣蟠牛氏(伊丹市)は五月末退会会▼太田木声氏(池田市)は五月限り退会。

新会員紹介

六月

山田 鳥莊氏(大阪府)正
水本 無人氏(大阪府)正
貴山氏推薦

御贈答に

大丸の 商品券

三〇円より五〇〇円まで八種類
京阪神の他高知・鳥取・下関の各大丸
にも共通 何卒御利用の程を……



大丸
大阪心斎橋

藍い海……………

赤い情熱……………

白い幻……………

自由と愛情と

そして夢の國

「友ヶ島」

それは青春への誘ひ

若人をさしまねく

新しい三色旗です

安西冬衛作

立園
國公

友ヶ島

南海電氣

近ごろ、藥屋や酒屋や醬油屋が自己の商品を宣傳する手段の一つとして新聞で川柳を募集し、所謂川柳大家（眞の大家はそんなものに一顧も與えない）と、宣傳部の人たちで選をすることが流行して



いる。商賣人が人氣のあるものを利用して自己の商品を少しでも多く賣ろうとする心の働かし方に対しては時にその熱意に敬服することもあるが、熱心のあまりに、その媒体物を冒瀆する行き過に對しては許容し難いものがある。いかに、そ

窓口に

廣川柳と選者

の物が（この場合川柳）世間に人氣があるうとも、その物（川柳）を冒瀆することによつて、しかもその宣傳しようとする商品を高く價值づけることは不可能であると云う位なことは知らなければなら

ない。仮りにビール会社が「ビール」を課題とし、醬油会社が「醬油」を課題として、弘く川柳の佳吟を募ることに異論はないが、營業主が商品を読み込むことを條件とし、しかも商品をうまくほめたのを佳吟とし、これを大家が選抜したもの

して價值づけようとするに至つては、あまりにも見えすいた廣告手段であつて、凡そ作品價值の選評とは縁遠いものである、そんな作品に川柳としての佳吟がある筈がない。しかもそれ等の凝似川柳を弘く社会に流布されることは、川柳への冒瀆以外の何ものでもないと思ふ。仮りに料理屋が、自己の料理を價值づけるために、この料理の調味料は鈴木味の素が使つてあり、醬油は丸金である」と稱している場合鈴木も丸金も別に抗議は申込むまいが、私の方の料理は弊店独自の調味料が使つてあるので特に美味しいので、味の素や丸金醬油を使つたのでは決してこんな味は出ないと、麥などころえ利用されたのでは默視する訳にはゆ

くまいと思ふのである。しかし私は前述の營業主や宣傳部員を殊更に非難しようとは思わない。それよりも、これ等の選句を委嘱された所謂大家の反省をうながしたい。僅な謝金や賣名によつて、川柳そのものをどの位冒瀆しているかについて三思してもらいたい。選をこそあれどは云われないが、特定商品名を詠み込んで脱け殻のような川柳を社会に流布することに賛成しないことのため、營業主に課題については一應注意をすること、宣傳部員との共選ならむしる選を辞する位の權威はもつてもらいたい。廣告川柳の選者中には素文の川柳漫画すら川柳の冒瀆であると云つていたように記憶するが、コレは論外か。（路）

不朽洞句帖

麻生路郎

未亡人利のつく金をごうする氣料理屋をさして貰えぬうちに切れ子が五人情夫は要らぬように云い夕立にいい見たと云うストリップ金ですむ恋もさみしきもののうち切れ話送る未練はありながらもしひよつと妻が死んだらなご思ひ耐をのむぐらいの金は友も持ち彼の一生雨雨雨のままだつた同窓がおうかた死んで家を建て老いにけり二号同志が仲がよし信心を二号の方が本氣でし敬遠をされて一人で飲みに行く



將軍娘 (七)

山路 閑古

(七)

侯爵の容態は一進一退で、期待した程治療の成績もあがらなかった。精神病といふものは外科的手術でも加へない限り、徹底的の治療法はないもので、靜脈注射などは二階からさす目薬でしかない。普通に治療と云つても興奮逆上の度を成るべく少くして、自然に恢復を待つ他はなく、靜脈注射もその意味から云つて適應した処置であるといふのに止まるのだった。

私は週に二回宛侯爵邸を見舞つた。その他にも地方の富家の往診を乞はれるので、無蓋の一頭馬車を求め、自ら馬を御しながら、可成り遠方まで出掛けて行つた。院長の俸給の他に、それらが公然の余得になると云つたやうな訳で、昔の判任属の收入に比べると、実に雲泥の相違があるのだった。

られることがあつた。その時は電話で直ぐ駆けつけるのであるが、狂人は人見知りをして、一切人を近寄せない。夫人でさへも最早意志は通じないのである。しかし幸ひ私は多くの狂人を扱ひ馴れてゐるので、私の顔を見ると、侯爵は狐が落ちたやうに鎮まるのであつた。侯爵は自ら腕を出して注射を求められ、その後私はこん／＼と眠る。要するに私がついてゐる限りは、さして手の掛る病人ではなかつた。しかし侯爵の存命中は私は金縛りに遭つてゐる形で、旅行は愚か、北陸の地を一步も離れることは出来ないのだった。

しみに、珍づらしい茶菓など用意して、私を悩らはれるのだった。夫人は私を先生と呼び、看護のみならず万づに教を乞ふといふ態度であつた。師として待つのでなければ、再び逢ひ難いであらうと云はれたことが、計らずもこゝに実現した訳である。又時には夫人も診察を乞はれることがあるので、医師としての接触は常人の窺ひ知らぬ境にまで及んでゐるのであつた。手を握ることも、腹を探ることも、医師なればこそ自由であり、手を握らせ、腹を探らせることも、医師に対してこそ恥づるところはない。私は夫人と親しむ限りに於いて、医者之道に志したことを幸福に思つた。

通つてゐない今日に於いては、全然他人にひとしいものがあつた。さればとて、新しい愛の道を開くといふことも、人倫として許し難いことである。私は侯爵夫人を愛すると共に、侯爵の幸福をもこひねがはねばならない。その意味に於いて、私が医者であるといふことが、最も好都合であつたのである。

幸福といふものは、それが極まる時には、すでにその裏に用意されたやうに不幸が孕まれる。その前提となるべき幸福が大きければ大きい程、不幸の度も大きい。全く禍福は絢なふ麻の如きものであるこれはよく知られた戒めであるにも拘らず、矢張りその際にならなければ、人はその眞意を会得しない。さうしてそれを会得した時は、もう遅い。或る夏のことであつた。侯爵夫人は海岸の別荘に赴かれ、清遊慰勞の爲に私をも招かれた。多くの女中や家扶に囲繞されての催しであるから、別荘に於いて一夜を語らふといふ程の、打ち解けた歓談ではなかつたけれども、ともあれ珍づらしい寛ろいだ清遊であつた。

一日夫人は私を野点に誘はれた。野点とは樹下石上に於いて茶を点てる遊びで、樹あれば憩ひ、草あれば坐り、隨所に茶を点て、楽しむのである。

別荘の裏口はすぐ海岸の砂浜に接してゐるので、私は自分の馬車を廻して夫人を載せ、自ら馬を御した。馬車が小さいので、更に女中一名、馬丁一名を便乗させればそれで満員となり、おのづから微行の体となつた。

馬車は微風に吹かれながら、さく／＼と轍に砂を嚙ませつゝ進んで行つた。私は白麻の夏服にヘルメットを冠り、御者台に坐つて長鞭を揮ふ。夫人はバラソルをかざして私と並んで坐り、従者らは却つて主人の席に畏まつて坐つてゐるのだった。

北陸の海岸は砂丘の發達してゐるのが特色である。殊にこのあたりの砂丘は最も雄大で、南北一里、東西二十里に亙る蜿蜒たる砂浜であつた。眞夏の日の照り返しの強い砂丘の中では、誰一人出會ふものもなく、又さういふ折を窺つて、一行は遊山に繰り出した訳であつた。

天然記念物のはまなすといふ、つゞじに似た可憐の花が到る処に咲いてゐる。時に馬車を停めてそれを摘み、胸にさし、髪にさして楽しんだ。

「先生、覚えていらつしやいますか。子供の時分、私どもがよく馬車に乗りましたこ

とぞ」

と夫人は云はれた。

「あゝ、覚えてゐますと
も。僕は親父の荷車に乗せら
れてゐましたな。あれは傑作
ですよ。今から思ふと」

「どう／＼あなたと一つ馬
車に乗りますのね。運命とい
ふものは不思議ぢやございま
せん」

「全くです。而も志のある
ところ道生です。僕は今日
のあることを期待してゐまし
たよ」

「まあ、博士は……」

夫人は感慨に堪へぬものゝ
如く、身体を寄せられた。

「私もは一体幸福なので
せうか」

「さあ、どんなものです
か。幸福とは何ぞやといふこ
とになりますな」

「欣三さん。私は子供のあ
の頃に返りたい。私の幸福は
あの頃のことでした。」

「ところが僕は不幸でして
ね。あの頃は蟬を賣つて居り
ましたからな。下層社会には
蟬賣りといふものはあります
が、蟬賣りといふのはめつた
にない」

やがて野点の場所に來た。
そのあたりに小さな社があ
り、馬車はその社の森に繋い
だ。従者らは馬車の番に残し
て、茶道具は私が持ち、夫人
と唯二人、お種が池のはざり
へと下りて行つた。

砂丘の中に周回半里に余る
大きな池があり、お種が池と
名づける。鬱蒼たる原始林に
囲まれ、太古に生じた源は底
も見えない程に透き通つてゐ
る。この池で泳ぐものは命が
ないといふは、人も近寄らな
い程に怖がられてゐるのであ
つた。

私は手近かの枯木を折つて
火にくべ。携へた茶釜をそれ
に掛けた。又そのあたりに
毛氈を敷き、それが簡易の茶
席であつた。

「お湯が沸くまで、水浴で
もなすつては」

と夫人が勧めるので、
「では御免蒙つて裸になり
ます」

と云つて、私は洋服を脱い
で猿股一つになり、迷信をも
のともせず、池の中に入つた。

水底は砂利で、水は眞夏と
も思はれない程冷え切つてゐ
た。汀を少し離れると、もう
背は立たないので、私は静か
に泳ぎ始めた。

夫人はバラソルをさしか
け、汀に立つてそれを見て居
られた。

清冽な水中には長くは入つ
てゐられなかつた。私は濡れ
た身体を婦人に見せるのは尾
端であると思つたので、少し
離れたところの汀に泳ぎ着
き、そこから水を上らうとし
た。すると夫人は急いでその

方へ馳せ寄つて、殆ど手をと
らんばかりにして私を迎へる
のだつた。

「欣三さん。昔かういふこ
とがありましたね。そら、あ
なたが川の中に入つていらし
つて……」

と云ふかと思ふと、もう両
眼に涙が溢れてゐた。その様
があまりにかばそく、あでや
かで、つと抱き支へようとし
たが、濡れた身体がそれを思
ひ止まらせた。

夫人も私も同年で、すでに
四十を越してゐるのである
が、私が童貞である如く、夫
人も処女であるのに違ひなか
つた。処女のまゝ移らうた色
香といふものは、玉に譬へれ
ば翡翠であらう。

眞夏ではあるが、身体を冷
して後に当る焚火は快いもの
であつた。私は裸のまゝで、
夫人の点てる茶を二碗まで呑
んだ。

「裸茶といふのは、光悦も
知らぬ知恵でせうな」

と私は云つた。

「恐らく奇行ですのね。こ
の道にはないことです」

と云ひながら、夫人も自ら
点て、自ら服した。

「欣三さん」

「何ですか」

を殺して下さい」
夫人は睫毛一つ動かさず、
平然として云つた。
「殺せとは、よく仰言いま
した。しかし裸が茶道でない
やうに、殺人も医道ではない
のです」
私は笑談として軽く受け流
した。
「でも私が命じたら……」
「いと易いことです。一拳
手一投足です。水火もいとひ
ません」
「では、瀬木博士、私の生
涯にまつはる不幸の綱をたつ
ことを、この幸福の瞬間に於
いて、あなたに命じます」
と夫人は嚴かに云つたかと
思ふと、は、は、は、は、と
異様な高笑ひをされた。
座興にしほは恐るべき笑談
であるが、私には夫人の氣持
はよく判つてゐた。それは、
王様の耳は馬の耳と叫んだ、
あの理髪師と同じやうに、こ
の幸福の瞬間に思ふことを
すけ／＼云つてのけることの
樂しさが、幸福の上にも幸福
を添へるものであつた。
唯それだけのことで、他意
あるものでないことは、医師
として、私の最もよく理解す
るところであつた。換言すれ
ば、夫人も亦正常の健康状態

ではなかつたのである。とも
あれ侯爵の病氣を一日も早く
治し、私の及ぶ限りに於いて
御夫婦の幸福を護りたいと私
は思つた。

野点を終へて、又馬車を駆
つて砂丘を横ぎり、私たちは
何の屈託もなく別邸に戻つた
のであつた。

その後侯爵の容態は日一日
と快方に向ひ、一時直つたか
と思はれる程に正氣づかれた
が、そのまゝ、はつくり薨去さ
れた。快方に向はれたと思つ
たのは残燭の燃え上りで、死
因は心臓麻痺と診断された。

瀬木博士は刑期満了して
獄中に於いて病死した。その
後誰が持ち運んだとも知れ
ず、お種が池の汀に小さな墓
が出来た。碑面には路傍にあ
る馬頭観音と紛れるかのや
う、馬耳観音とだけ刻んであ
る。その碑銘は博士の遺言に
よつたもので、馬の耳の愚話
に因みあるものであることが
察せられる。さうして建立者
はせつとのみ認められ、博士
の死後もこの女性はならへ
てゐたことを語つてゐる。
この幕は今でもある。



大阪市 武部香林

國運旗の下を或る日は闊歩する

棄權すなど小学生の音がする

もう利子で食えぬと知つたアドルムか

巻舌の蛙と春を惜しみける

味氣ない生活会報を忘れかけ

平塚市 木村孤浪

お茶道具だけあり銀行待合所

ニイチエの如く強かれこぼすまい

左右から孫に押される酒の味

お銚子のお代り孫に世辞も云ひ

見てくれの葉巻は口にもてあまし

三味線の賣場主任は少し弾き

横浜市 福田山雨楼

山吹も茶種も黄なり職を辞す

演説え元首相にも集らず

寝たまゝでわが一生は終りそう

退職に三月末でつれがあり

浪人えもう変哲もないラジオ

浪人の大声を出すこともなく

兵庫縣 戸倉普天

たまさかに酒屋の亭主下戸であり

村長退陣(二句)

蚊も蚤も村では人を刺すものぞ

末遂に顔を立てるとからみつき

風呂敷を掀け罵り落選し

焼ける電車雨もる汽車にころぶバス

お許しがあつても日の丸出し忘れ

教頭えある日やたらにじようする

共産党といわれそうなる口をさき

アルバイトする決心になつた父

思い切つて買つてつけとる白い羽根

唐橋の下と上とで帽子ふる

ホノルル内藤草一郎

自動車を洗ふ身分に乘る身分

だつてもう遅かつたわと泣きじやくり

御近所のよしみ藪でも呼んで見る

焼香のうなじ沙門の身を恨み

心機一轉振られて帰る夕まぐれ

承知せぬ親へ娘の腹を告げ

後妻でもいゝわと娘氣が弱り

猫でさへ時に帰るに兒はいづこ

尼崎市 水谷鮎美

しらさきより

噂から二十年経ち子沢山

ユモア一の一人はお酢をのまされた

幾度か別れ話が酒となり

手短かに話して欲しい瘡に触れ

しんみりと話しましょうよおないどし

内職をきくに掛けけておごらされ

奈良縣 西垣錦風

團子鼻矢張りあなたの子と笑ひ

満ち足りた顔で出て来るお汁粉屋

岡山縣 浜田久米雄

年寄りに好きなおかずを聞いて来る

代筆でない礼狀を読みなおし

入選の宵を三倍ほど費い

大阪府 西尾

末つ子にキッスをすれば噛みつかれ

肩書を見よと許りの名刺くれ

松葉杖とめて落花をふり仰ぎ

湯の宿の廊下スリッパ二つづつ二つづつ

しやべらなかつた事が大物にされ

大牟田 高田抱逸

生理から急に思春期こわくなり

縣人会昭和生れはお爛方

昭和生れアブレゲールの肩を持ち

佐賀縣 松野えいを

子を抱いてサンマertimeへ欠伸する

押し掛けて来られて嬉しい悲鳴あげ

蹟いただけのことではなささうな

大阪市 市場没食子

碧い眼の子でも孫なり負ふて出る

処女非処女半処女金が仇の世

妻に客あり末の子と風呂へ行く

既製品で合はぬ肥満の替すぼん

子から手が離れたとこへ二号の子

女給にも向かない年をかこち合ひ

名古屋市 吉田水車

飛ぶように賣れたはサクラだけの数

選挙風景

もつたいなや元知事さんにおじぎされ

マ元帥に感謝

英雄を送る日本に櫻散る

陛下五十回御誕辰

満才で行こうが五十あらそえす

ある丈の茶碗を汚す妻の留守



とつくりの座はりのよいも賞めて置き

選挙棄権

大阪市 須崎 豆 秋

父として子のよい癖は見違さず
靴売り商賣女といふ手附き
岡山縣 大森 風來子

手切金だせる身分をうらやまれ
世話好は避妊の話までもする
たまさかの映画喜ぶ妻いとし
帽子傘今度は何を忘れるか

旅にいてだが市長になつたやら
やれ帰阪したぞ靴も切られずに
春雨がボチャ／＼猫を抱いて寝る
天皇に春の運動会もなく

大阪市 竹内 潮花

灯の下に四十の恋がむせかへり
義理の仲ですと女は冷たく出
麦の穂の上からのぞく淡路島

昇格の早さへ名刺間に合はず
どぶ酒となつて恩師をいたわりぬ
落選をしたが二号を探しあて
親切を小出しにされる未亡人
絵はがきの文面女と居る氣配

大阪市 木下 幽王

おかげが吹こぼれた騒ぎ病人飛上り
女房も信者になつた怖しさ
開役に廻つて酒の不味いこと
氣のおけぬお客と見たか番茶が出
夫婦不和百目二百目やせて行く

滞郷(三句)

兵庫縣 北川 春巢

まかされた顔を散髪屋なでちやちやこ
からませた足不本意乍らとは知らず
ダブルベッドにしろきげだもの
鳥取市 中島 鉄洲

断水に礼を云はれる井戸の家
貧富の差つけす水道音を立て
岡山縣 山分 淑郎

還暦祝もしてあげず母六十四
此の島の景氣を瓦屋根に見る
会者定離すぐふるさを後にして
子沢山らし八匹も鯉幟
美容院裏へ廻ればおむつ干し

奈良縣 尾崎 方正

玉石混淆学会の幕が開き
働く娘取出して読む次郎長
くたびれた服が氣になる春の雨
齡の差が阿呆らしいものにして仕舞い
女將の眼飢えた狼見逃がさず

夕櫻たつた独りで見て戻り
花のるす書に親めば猫の來て
会社創立
社長の椅子は此処らがよかる外が見え
人生へ酌婦フンと言つただけ
恋愛を娛しんでゐて嫁きおくれ
貞操の事で女の議論急
吸ひさしのタバコ女が吸ふと云ふ

内心は聊か惜しい形見頒け
職階は違つて居ても飲仲間
酒在り妓あり脱税して居たり
市議選舉自由党には義理もなし
勤続二十年で肩書のない名刺
兄の顔藝術性がなくまるし

大阪市 新川 博也

芝居する女のうそを見破れど
貧しさに触れず夫をなぐさめる

共学は男の威厳地に墜とし
いゝすぎたことが崇つて落選し
脛嚙る口で権利の自由のと
撒水車白足袋とても容赦せず

大阪市 水谷 竹莊

愛情の露露こんなに妬いて居り
クリスチャン暫し説經を持て余し
賄路もう貰うた先を忘れかけ

奈良縣 飯降 白香

下関市 櫻川 不水

山口縣 長野 井蛙



奈良縣 西辻竹青
無投票盟ひは派手に炭坑節
肴には箸をつけない飲みつぶり

大阪府 友淵貴山
御亭主の腕を信じて産み続け
近道が大きな池につきあたり
試験場外は花咲き鳥歌い

布施市 森下愛論
断われそうに押賣声をかけ
鏡台に座る間子供抱かされる
下心知つたか女は座を外し
別邸の女冥利につきて病み
星空が好きな女と腕を組み

大阪府 大西柳堂
母の恩返さぬ内に五十過ぎ
運命をみな金に見る年になり
新刊の言ふ程にない古い作

大阪府 太田良子
老眼をかけてまだ読む積りなり
君の爲ならばと云ふた頃もあり
命まで賭けた女でこれかいな
母の日だ子供は家にほつこ
客足が途切れせんざい水をさし

岡山縣 直原七面山
未亡人子供に詫びる日もありて
未亡人一應虚勢張つてみる
未亡人主人の箸で食べてみる
未亡人へ民生委員力入れ
ダンスでも習うかなと未亡人
押し切らぬ男へ女腹を立て
逢曳の電話眞面目に應待し
電話では話せませんと甘へる氣

療養所たゞ名許りの妻を持ち
肴には箸をつけない飲みつぶり
宿題に頼寄せてゐるバ、とマ、
うちの子もひばりちやんにならんかいな
指の傷風呂屋でわチト大げさ
粥炊いて昨日の派手をシミジミと
メーデーにビルデングは小さく見え

大阪府 西森花村
著者だけが無疵で残る回顧録
流暢な耳をすませば朝鮮語
美しくと花をほめたをひがまれる
損をせぬ範囲で正義漢で居る

鳥取市 河村日満子
病床にて(四句)
風邪十日食べたい物を尋ねられ
病床に蒲團おもしろい如くのる
早退の三十九度を言ひふらし
臥てる間のこと花が咲き花が散り

兵庫縣 家沢薺花
寒い日は休める議會うらやまし
女子選手なれぬサインに手がふるえ
レストラン芋でこらえた日も忘れ
フラツシュをあびるになれて時の人
温泉に居る間に糸の値が下り

岡山市 藤本満年
花散ればたゞ一介の並木なり
口下手がいえばほんとが嘘になり
正道を歩めば道の遠きかな
諦観はやつぱり負けたものどされ

滋賀縣 黄瀬美秋
税務署と腹立て損の喧嘩をし

熊本市 西口如川
くれるからもらふ程度の薬瓶
押えられてからのミシンでまだ稼ぎ
税務署で口達者なを認められ
愛人へ納税預金まで貢ぎ

若過ぎて金と夫婦になり切れず
惚れている方は命令待つ如し
鈍感ネなどと女は爪を研ぎ

岡山縣 福島鉄兒
氣ますきはゆうべのまゝの膳に座し
悪いとこばかり委しに似たと云う
頼んでもない往診に慌てたり

岡山市 藤本茶々
三人の一人がまたもや出て出した
早く相手見付けると父は開けてる
只の女中だとはいじらしい妻もあり

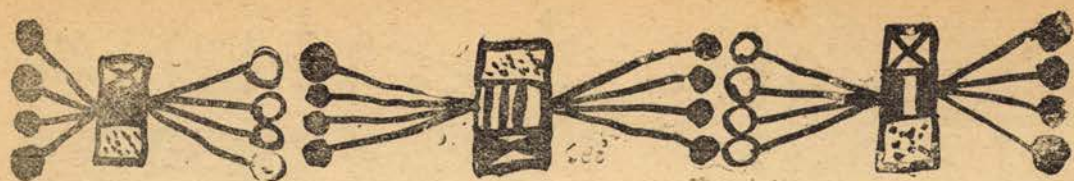
兵庫縣 榎南夏六
認識をさすべく突如子は泣きぬ
吊り革へ全く酔ひを預けてゐ
街録は抽象論をもて余し

アベックともなればうらないには非じ
卑屈な笑ひ誰が子供に教えたか

大阪府 伊藤迷宮
應接間元隊長を送り出し
諺へ明治生れが口を出し
神の愛信じぬ孤兒の面構

大阪府 西口如川
別れてはみたが自分が悪かつた
六十を過ぎ養子も人の口
お見限りどすえ金魚は浮き沈み
身の上を話し期待を裏切られ

岡山縣 高山朗笑



外出の家に風鈴しきりなり

四月馬鹿社長を一つやりこめる

二人の中に地位が邪魔となり

道遠く空遠く二人何処に行く

岡山縣 服部十九平

親切な女医が病氣を長びかせ

姑に纏の掛け方教えられ

ひき蛙蹴られたことが腑に落ちず

眠てる間と附添クリーム食べてゐる

幸福に女房をしようと思ひ

岡山縣 大森娛句樂

借金は呉れず犬まで吠えつかせ

選挙後の村で驚だけが啼き

護送までされた命をほつとかれ

君と僕黙つてゐてもつける妻

西宮市 田辺由布

お前等はのけ／＼雨のバックカード

財産も遺言もなく凡夫の死

マネキンに見とれ恋人つかれさせ

大分縣 桑原表情

後妻かと聞かれてうれし若づくり

投票をしたに招ばぬとねちこまれ

花はやさしき草の千里にバスゑんこ

熊本縣 成瀬月仙

税務署へ行くには惜しい花盛

待望の角帽これから恋します

金もたぬとは仰言らぬノーハット

妻を踏む足でホールの床も踏み

針箱の隅で再軍備待つ針

芦屋市 若林草右

新米の掏摸を捕へたミスボリス

手の切れるお札は電氣にすかしてみ

選挙(二句)

街頭に憂國の士の多すぎて

政見発表演説するとはいはず

大阪市 足立春雄

彼岸日和フト散髪がしたくなり

父かへるタバコの匂ひ子に移り

病室写生

薄化粧患者は危機を脱したり

大牟田 中村五醉

子に嘘をつくまい動物園へゆこ

叱つて下さいと父嫌やな役

女房に負けまいとする愚かしさ

お茶お花和裁洋裁肥も泣み

熊本縣 有働芳仙

ぼろ／＼の聖書へ閉病未だ続き

倦怠期プランは別居ときめた儘

新妻のいとしや改札遠く待ち

香川県 大西迷窓

青い海眺める職場ではかどらず

土曜日は妻とテニスをする生活

親ゆづりなどと負けない酒の量

岡山市 延永忠美

一票を頼みに来ない身もさびし

算盤の二と二が三に成る選挙

大阪市 浜畑胡蝶

耳うちは嬉しい事か只笑い

父に似ぬ兒で母親は淋しがり

シャンだなと思えば妻が立つてゐた

大阪府 阿形一杉

蚊にとつて二の腕こそは処女地なる

四月十八日危く類焼を免る(三句)

業火遮ぎるハツ手の手柄知らざりき

家財より本の多きをいぶかられ

災難の身近か／＼と迫る年

岡山縣 大森苑女

姉妹がおんなじ顔になり老いぬ

黙つてさえおれば平和な家へ嫁し

独習書積んで不満な職に就き

下関市 石川侃流

五百円札ボチの單位が少し下り

心安そうに保険屋つきまとい

岡山市 大倉四案

團體が来てアベツクは腰を上げ

小使をするに若さが承知せず

靴磨き同志脚線批評する

廣島縣 山田秀贊

女房にわびる氣のんびり呑んで居る

晴着とは比較にならぬやつれよう



たっぷり

愛嬌たっぷり

B1 たっぷり



疲労と脚氣に

強力 **スタボリン**

錠・注・無痛注

柳川新

評釋百句

(Ⅲ)

昭和の作品から

麻生路郎

近道はよそうに父の老を知り

(孤浪)

駅の改札を出て、國道を通ると数町もあるが、駅の構内から線路づたいに行けば半分の道のりもないところがある。この句の場合、危険の伴う近道避けて、少々道のりは遠くても、たんたんと國道を行かうと云う父の言葉に、フト父の老いを知つたと云うのである。黙つて父のあとに従つたことは云うまでもあるまい。淋びしい句ではあるが、味のある句だ。

ハウマツチ指四五本で答えたり

(不二)

どんな店かは判らないが、どうせ小店であることには間違いないだろう。ドヤ／＼とG.I.が這入

つて来て、日本品の物珍らしさに、アレをとり、コレをとり、「ハウマツチ／＼」を連呼するが米語会話の一二冊のぞいたぐらいでは、実戦には役立たない。しかし賣ろうと云う商魂はおそろしいもの、咄嗟に指四五本で値段を答えたのである。態度が眞剣だけに一層情景はユーモラスである。

みの蟲のなんぼ飼うても壁だつた
(豆秋)

これは擬人法の句であつて、みの蟲の單なる写生句ではない。作者は、みの蟲をかりて自嘲しているのである。なんぼ飼いても、一個の社員に過ぎないことを嘆じているのである。深い味のある句である。

道とへば嫁にもほしい教えやう

(月都)

「こゝんどこを眞ツ直ぐに行くと橋に出ます。橋の手前を左に曲つたところが三丁目になります。三丁目の何んと云う方をお訪ねになります。エ、それだつたら、曲つてから一ツ向うの筋の角から二軒目のお宅です。妾もそちらの方へまいりますから御案内いたしませう」と今時の娘さんには珍らしい親切な應對ぶりに、スツカリ感心してしまい、あゝ、うちの息子にこんな嫁を貰

つたらと老人は老人らしい感懷をうかべているところを詠んだもの、情景が躍如としている。

税務署が居るのに電話またかかり

(無骨)

近ごろ会社などを訪ねると「税務署が来ていますので一寸失礼いたします」と云う言葉をよく聞かされる。税務署に來られると、主要人物は何をおいても、面接して歓待これつとめるのである。この句の場合、下五の「またかかり」の措字が実に輕妙である。商賣をしている以上、しきりに電話がかからねば、こまるのであるが、税務署が來ている時ばかりは電話も閑散であつて欲しいと云う商人心理が「またかかり」から類推されるのである。

貧乏はいといませんと云うたけど

(良子)

一二の魂が結合して一つの屋根の下に住むまでは、どんな貧乏だつていといませんと云いはしたけれど、さて文字通りの竹の柱に萱の屋根では前途が眞ツくらで、いささか悲觀せざるを得なくなり、月日が経過するにつれ生活上の不安が拡がつてゆく心境を詠んだもの「云うたけど」と云う下五の措字にそうした煩悶を包藏させていることは説明するまでもなからう。

名門の兒と云ふ丈で副社長

(草一郎)

大学は出たが、ただの凡兒と云うのが通り相場。あそばしてもおけぬと云うので関係会社へ張り込む。その親に対して平社員と云う訳にもいかない。あつても無くてもいゝような副社長の椅子

が與えられる。会社がしつかりしていれば当分は無難である。穿ちの句として面白い。

未亡人讀めない本を賣りもせず

(草々)

古本屋の店先で、一ト括りの趣味雑誌や藏書印を捺した同一人が所持していたのであろうと思はれる書籍を見かけると、何んとかなくさびしい氣持にとらえられ、パラ／＼とページを繰つて見たくなるものである。心なき家人が二束三文で賣拂つたことに想到するからである。しかし、この句はそれと反対に今は亡き夫が愛着措かなかつた書籍を、たとえ読めなくても賣りもしない未亡人の哀情を詠んだもので、しみ／＼したものを感ぜさせる。

議場では總理大臣吉田君

(水車)

面と向つては頭のがらぬ代議士も、議會では吉田クンを連呼する。作者の皮肉な觀察から、代議士に対して一種の輕侮と嘲笑を透つていことがうけとれる句だ。

調和などどこ吹く風とパーマ揺れ

(方正)

美は調和にある調和のないところに美はないと戰前派は考へているのに、これは又どうしたことであらう。顔が丸からうが、四角だらうが、三角だらうが扁平だらうが、一切おかまいなしのパーマである。問題は顔だけではない。服装にしても和装であらうと洋装であらうと、ハイヒールであらうと下駄履きであらうと調和無視のパーマ横行に作者は一驚を喫したのである。時代の一断面をキヤッチした写真の句である。

説明を便乗て聞く美術館

(弓削平)

美術館を一人でのぞくと云うことはなか／＼おつくうなものである。それが國宝であらうと、泰西名画であらうと、米の飯とは直結させにくいからである。たとえ一人でのぞいても、親しく解説をしてくれる人がいないと、猫に小判である場合が多い。

いゝ仲と知らず間へ席をとり

(竹莊)

ボンやりしていると、よくこんな場面にブツつかるものである。そうとは知らず女の顔の批評をやつてのける人さえある。そうと知つて、ワザと間へ割つて入る人もあらう。人の世の面白さが、そんなところにもあると云えば云えないこともない。しかし、そうと知つたらなるべく間へは席をとらぬことである。

向う向く娘財布を明けており

(柳堂)

小さな財布、僅か這入つてゐる財布、それを意識してか、向うを向いて財布をのぞいてゐる娘の姿は、穿ちには違ひないが、どちらかと云えば戰前派だと云えよう。戦後派は百円札を幾枚も手づかみにしているのをよく見かけるが、娘心理ぐら

いに、戦前と戦後とが百八十度の轉換をしたものはあまり多くはなからう。

義めば租税や寄附に困る由

(文庫)

お宅などは、戦災には罹らなかつたし、息子さんは無事に帰還されるしと羨ましうに云うと、どうして／＼余所目には結構に見えていますが、まだ前の税金を完納してないのに、もう次の税金の配布が来ていますし、それに、焼けなかつたものですから寄附と云えば一番先に云うて來られますし、ホト／＼困つてゐるのですよと云う。斯うした繰り言が敗戦國ではいつまで続くことか。

自分からアブレと名乗る娘を育て

(孤浪)

一寸先は闇だと云う言葉もあるにはあつた。刹那主義と云う主義もあるにはあつたが、所謂戦後派のように現実と取ツ組んではいけない。その段「妾はアブレですわ」と自ら名乗る娘には、自殺ぐらひはヘツチャラであり、彼女たちを縛るモラルを持たないことが一つの特徴だと云えよう。そうした娘を育てるのに、古い殻が破れない親の悲哀が、この句からにじみ出ている。

(つゞく)

愉しき哉
頭痛なき人生

頭痛新薬

タミシ錠



特許サニテール自動包装使用

アメリカ・アイバース・リ社



川柳と夏の行事を語る

麻生 路郎
沢田 四郎作
須崎 豆秋
戸田 古方
水谷 鮎美
柴谷 宰二郎
寺井 鋭々
(ABC順)

豆秋「今夕は我が『川柳雑誌』創刊号(廿九年前)の表紙に柳を書いて下さった柴谷画伯や民俗学の沢田医博を交え、川柳と夏の行事に就て座談を催すことにいたしました。今夕はと申し上げましたが、只今七時過ぎですけれどサンマータイムの事とて、未だ外は明るく今夕と云う感じが全く出ませんが、夏の行事の先駆を行くこのサンマータイムの事からお話をお願いいたします。どなたかどうぞ……」

路郎「先づその可否論から聞いてみたらどうかね。今日岡山の『夕刊山陽』を見ていたら、各界の人達に賛否を聞いているのに十四対六で不賛成の方が多かった。此処ではどうだろう。豆秋「不賛成なのは勿論お神さん達でせうね。古方「朝早いのに夕方九時頃帰るしな(感然)宰二郎「一番影響のあるのが妻君でしょうネ。鮎美「私も早起早寝の方です。」

路郎「嘘云へ(哄笑)鮎美「どうも日本人にはピツタリこないように思はれます。尤もサンマータイムはもう四年前から実施されてゐるのですが、寝不足勝な日が続いて体が疲れるのがひどいので賛成しかねます。路郎「僕はサンマータイム制には賛成だが、今の一時間早めるのを反対に一時間おくら

マータイムは丁度その頃から始まりました、正に打附の夏の前奏曲であります。そして此のサンマータイムの時こそ百パーセント女房孝行が出来たのです、その意味で私は喜んでいいます。路郎「女房孝行でどんな事をやつてゐるんだね。古方「第二に子守……路郎「ホホ……古方「薪割り、飯炊き……なんでも女のする事を一通勉強さしてもらえい、時期です豆秋「女学校の先生やからな路郎「えらいもんやな。古方「本当やつたらね。路郎「アイロニーだな。豆秋「サンマータイムに賛成している様な川柳に齊花さんのサンマータイム退ける頃からしやんとする。路郎「それは賛成していいないよ。鮎美「サンマータイムやのうても退ける頃になつたらしやんとしまつせ。豆秋「反対してる句に聴松さんのサンマータイム母最初から不足なり。と云うのがあります。鮎美「(柴谷氏に向い)「画かきさんには、余り差支えがない様に思はれますが、如何ですか。宰二郎「え、その通りなん

です。路郎「結局サンマータイムは都会であれば勤人の問題である。先程僕が云うた様に、日本ではサンマータイムは一時間遅らしウインタータイムは一時間早やめれば却つて理想的なものになると思う。現在のサンマータイムは直輸入の弊害を歴然と表はしているいい手本である。爲政者はもつと自然に則して出来る相談をやつてくれぬと困る。今は何時であるが、ホントの時間は何時であるから、もう少しゆつくりしなはれと云う様な、やゝこしい制度なんかは綺麗さつぱりやめた方がいい。鋭々「そのお説は夜の時間に對しての考へ方から云へば理由のある事ですが、朝の時間の取扱いは不便になる事があるのではないか。路郎「細かく云へば一人づつ自分の都合の云へば一人づつ方法はないわけで一つの制度として押賣すべき性質のものではない。仕事によつてはサンマータイムでなくても一般の人達が寝ている時分から働きにいかなければならぬ仕事もある。鋭々「勿論個人的に各人が出来る仕事であればその通りです、が勤人などの場合その会社なり職場で定められた時間に対応していかなければならぬと云う事になるのですか

ら、自分だけが都合のよい時間でサンマータムを扱うわけにはゆかないと云う事になります。

路郎「会社でもサンマータムの間だけ半時間遅らしてゐる所があるよ。」

鋭々「百貨店でも一時間間違えてゐる所がある。」

豆秋「雀や雞は無頓着ですな。」

（微笑）（この時沢田博士出席）

サンマータムは遅々として未だ外は明るい様ですが（八時五分）この辺で打ち切りまして、新歳時記にも載つてゐる事と思ひますが六月十日の時の記念日についてお話し願ひます。

路郎「僕は何とか週間とか言う様な物には同感出来ないものが多いが、年一回の時の記念日位はあつてもいいと思ふ。どうも時を守ると云う事は守りにくいものらしいが、川柳の集り位時間勵行をやつてゐる会は少ないと思ふ。世間的の色々の集りに「何時の案内であるから今頃行つたら丁度よからう」と一時間も遅らして出て来る様なかけ引はやめて欲しいと思ふ。サンマータムの問題よりもこうした習性に慣れた國民性を矯める方がづつと能率的ではないかと思ふ。」

鋭々「日本人の時の概念が余りに少な過ぎる事はいつも遺憾に思ふ事で、國家の選良たる國會議員或は官廳辺りの時

間をいゝ加減に考へてゐる事が甚だ多い、だから此の時の記念日にはウンと時を守る行事をして一般の國民にその概念を植付けてもらいたい。」

路郎「植付ける側の人が守らないのだから問題はないネ。」

鋭々「此頃一寸さうした点では私の会社は良くなつて來てゐます。」

路郎「月給が上るぞ（笑）」

鮎美「それは今迄は出勤時間があつても出勤簿はいつも各部の庶務係にあつて、だら／＼としてゐて、早い者で九時十五分、遅い者は十時頃、此の間に出勤して何の変わりもなく平然たるものであつたのですが、この二月頃から別な出勤係がザラリと各部の出勤簿を列べて、九時にはベルが鳴り九時十五分には出勤簿を取上げてしまふのです、部課長も迷ひ込みの体で一と時は混雑です（工場を持つ会社では早くから実施されてゐる事です）。こんな具合に一事が万事で混雑の滑稽に終らす家庭にも、廣くは先程云はれた様に國全般に実施されれば、

生活面に於ても一年中が規則正しく、時の記念日でなしに良い事が自然と実施されていくのではないでしようか。鋭々「貴方の所の鉄道関係の会社でさえも今頃そんな事なんでしょうか、現業だけ所謂鉄道時間で事務の方はそんな事だつたとは思ひもよらなかつたです。」

鮎美「成程その通なんです。」

路郎「これは鮎美君とこの会社に限らないよ。だから時の記念日の様なものが必要になつてくるんだ。」

豆秋「沢田先生とこあたりは患者が仲々時を守つてくれませんでしようね。」

四郎作「實際困りますね。朝から予定をしていてもだらだら来るでしよう。予定がくるうが叱るわけに行かず……」

風呂屋でもそうです、もう仕舞おうと思つてゐるのに來て困るやうで……」

風呂屋でも……」

舞おうと思つてゐるのに來て困るやうで……」

皮切りで……」

豆秋「六月末でしたな。」

路郎「その中でまあ御霊さん、天神さん、住吉さん、などが大物やと思うが、御霊さんだけ僕の子供時分の氏神さんだけに一寸最良目で入れたわけであらう、天神さんと住吉さんが大阪の代表的な祭だと思ふ古方「私の氏神さんも御霊さんでつせ、へへへ。」

路郎「うれしそに云うな（笑）」

鮎美「わたしは天神さんです。」

路郎「柴谷君は？」

寧二「私は座摩さん。」

路郎「寺井君は？」

鋭々「座摩さん。」

鮎美「座摩さん二点、御霊さん二点。」

豆秋「沢田先生は？」

四郎作「田舎ですから、大和



柴谷寧二郎画

皇が特別に関心をもちつてゐたわけではないでしようが、自分の時代に始めて傳つたこの水の時計が千年も後になつて日本の時の記念日になるとはまさか考へてられたわけではないでしよう。

豆秋「最近の「川雜岡山」に

十九平さんの句で定期に來たを幹事に笑はれるというのがありますが、時の概念が未だにこんな調子ですから困つたものですね。路郎「ワロ／＼夏祭に移つたらどうかネ。」

鮎美「地方の夏祭も沢山あると思ひますがまあ大阪から行きます。七月九日に生國魂祭があつてから大阪では二十五日の全國的天満天神祭まで十三あります。あゝそう、最後の止めの住吉祭を加えると十四になります。」

寧二「大阪では愛染さんが皮切りで……」

豆秋「六月末でしたな。」

路郎「その中でまあ御霊さん、天神さん、住吉さん、などが大物やと思うが、御霊さんだけ僕の子供時分の氏神さんだけに一寸最良目で入れたわけであらう、天神さんと住吉さんが大阪の代表的な祭だと思ふ古方「私の氏神さんも御霊さんでつせ、へへへ。」

路郎「うれしそに云うな（笑）」

鮎美「わたしは天神さんです。」

路郎「柴谷君は？」

寧二「私は座摩さん。」

路郎「寺井君は？」

鋭々「座摩さん。」

鮎美「座摩さん二点、御霊さん二点。」

豆秋「沢田先生は？」

四郎作「田舎ですから、大和

です。只今は仮りに生根さん
路郎「結極天神さんですね。
僕も玉出におつた時分は生根
神社です。生根とは男根を意
味するものです。歴史家知ら
んやろ。

古方「ギョツ、へヘツ。

路郎「昔御旅支部というのが
「川雜」にあつて歯科医師ば
かりの会で……櫻井四角君や
生田翠夢君等が牛耳つていた
時分生國魂さんの夏祭によく
招待されたものだ。夏祭には
宵宮から御神燈の影に美しい
女の姿があちこちするし、軒
先では立版古を楽しんだり、
軒先將棋をしたり、花火線香
をもてあそんだりしたものだ。
（わががちに懐古的にな
り、こゝのところが驟然。喰べ
るものでは鱧、蛸、うなぎ、
冷どうめんが祭り氣分をだし
た。

一同「ソヤ〜。

幸二郎「境内ではナンパキビ、
海酸漿、水中花、吹矢なん
かが……。

豆秋「お祭氣分といへば瀬戸
物町あたりはいゝですな、陶
器神社のお祭です。

路郎「輒では干物で人形やつ
とつた。

鮎美「へえー、あの乾物の干
物でつか。

路郎「そうだ。時代ものや、
時事ものを頼の魚問屋は干
物、陶器問屋は陶器で……今
の菊人形やつゝじ人形式にや
つたものだ。瀬戸物町と云
う町名はないが瀬戸物屋が押
並んでいて、半端もんや見切
品も格安で賣るので随分賑わ

路郎「御渡りの事誰も云えへ
んな。天神さんの御渡りは素
晴らしいもので、僕は天満の
天神社から出した記事係の舟
に乗つて、亡くなつた吉岡島
平君と、渡御状態を翌朝に到
るまで書綴つた事がある。そ
れから住吉の夏祭は何と云つ

つてまで大阪歌舞伎座の轡帳
に天神祭の風景が細々と描き
出されていて、四十年前の童
心を揺振つて呉れるに充分で
あつた。
鋭々「戦時中から船渡御が中
絶されていますが、あのドン
ドコ船の音と炎々天を焦すと

松山 前田 伍健

東京 富士野 鞍馬

ライオンも撫でる氣子供手を伸ばし

予期してた通り八重子の離縁さく

視察團役目は役目酒は酒

修養も父はお酒をのみながら

老眼鏡ナト低過ぎる妻の鼻

落選したとあつさり書く便り

よい時候寒暖計は忘れられ

租税完納をめづらしそうにはめ

あさからの智慧や議論は他人様

はつきりと和裁の方は不得手です

金 沢 安 川 久留美

大阪 橋 本 緑 雨

お愛想に出すカキ餅や歯の話

よこたわるセータ芝草いろどられ

かき山は見ただけ葉巻緩やかに

水商賣ならさしてくれと云ふ

いろはには福徳円満預金の名

一人ならこんなに歩きませぬとは

同 舟 近 詠

つた。

幸二郎「イビツになつた物や
半端物などでした。

古方「私はもうねえ、瀬戸物
町と云えば祖母や母の後にく

つついて、一銭でも値切らんと
損やと思つて連中が得心

のゆく値になるまで待たされ
て閉口したものです。

ても宵宮の堺の大浜の夜市を

ころの篝火が、今でも耳にき

思い出す。これは八月一日の

こえ眼にうつります。

本祭の日の爲に魚を皆が買い

鮎美「私は福島に居ましたが

出しに行くのである。そして

一番見易かつたのが大阪病院

海岸の砂上でのエロティック

の二階でした。

な話題があるが、僕自身はそ

路郎「玉出には台昇というの

の実行者ではない。

が出て、提灯が塔みたいにな

鮎美「天神祭の御渡りで幼な

線が出来たので段々やれなく

なつた、非常に高いんだね、
これは夏祭氣分が十二分に出
たものです。

幸二郎「台昇で思い出した
が大阪歌舞伎の『夏祭浪花
鑑』などは大阪の夏祭氣分を
出した代表的なものでしょ
う。

鮎美「そうです、そうです。
亡くなつた雁次郎と夏祭をマ
ツチした私の句に、
雁次郎の鼻のあたりに祭の灯
と云うのがおました。

路郎「私は行事というものは
大休、人爲的なものと自然発
生的なものがあるが、人生を
享樂する上に非常に役立つも
のであるということを常々思
つてゐる。行事が單に便利主
義なものでなく、大衆的に人
生を享樂させるものだと思
は、ムヤミに新らしがつて折
角の行事を廃止したりしない
ようにしたいものである。

サンマertimeのように、人
爲的な行事には、兎角無理が
伴い易い。この方面について
はよく考えて見る必要がある
うと思ふ。

豆秋「大変愉快な座談会でし
た。有難うございました。

(POE筆記)



川柳騒動記

東野 大八

金をためることしかしらないやが天の某氏が、趣味百言と私を訓めたことがある。百言また百利の基とは判る相手でもないで、五百助並に相手にもしなかつたもの、その百言一時におちるエライ騒動をひきおこした。もとよりその低氣圧のセンターは川柳である。

話はいさゝか古いが、ことは昨年十月の新聞週間のみぎり、私はその週間の企画に、新聞を縦横に論評する川柳放談会の企画をたてた。場所は本誌でおなじみの長野文庫氏宅、集るもの七、八人の私共は文庫ヨシセイといつておきの「文学堂ブランドイ」突は焼酎をチビリチビリとなめながら司会をつとめ、至極活達大いに新聞をヨコタテにケンケンシガクガクしてもらい、社提供の賞品を賭けた「新聞」の句、約百句を得、いゝ氣持で引揚げた。

ところがである。写真入りでかなり派手に纏めたその座談会が載つた翌日、それに出席した一人が、青くなつてやつてきた。

「私の職場へある旬刊新聞の社長がやつてきて、私を出せ、とわめくんです。そして二時間以上も人

前でゴテゴテと文句をならべるんです」と説明するのをきくと、ごうやら座談会の句、談話ともに旬刊、週刊紙に集中存分にやつけたことが相手方に心証を至極悪くしたらしい。

「本当に困りましたね」

としよげかえつて、不安そうに首スジをなでる。私もその姿をみて責任上黙つてもおれず、

「責任は私にあるから——」

と立派な口をきいてみせた。しかし、私はこの問題について、相手も一應新聞人と自負するのなら、今少し紳士的に出てもよさそうだと考へてゐる矢先、また一人、おつぎに二人といつた具合にぞくぞくやつてきた。みんな同じ脅しの手口で脅かされたらしい。なかには「女房がです、これにこりて川柳は死ぬまでやめろというです」と氣弱に笑つてみせるものもいた。

「一体どんな句をのせたんだい」と社の連中も氣にいらして、新聞を改めて読み直したり始めた。「週刊紙あれを書くぞと金にする」

「読むとは廣告だけの旬刊紙」「週刊紙一枚づゝが領收証」

など、こりやひびいや——と誰かが笑つた。憤るのは当り前でせう。と営業の連中も面白がつて冷かす。

一日おいて騒ぎは一段と大きくなつた。縣下の各支局通信部から、

「あの座談会でこれこれだ」と迷惑そうにいつてゐるのはいい方、なかには、

「なぐりこみをかけられた」と記事もホツタラかして、息せき切つてゐる若い支局長もいる。かくして正式抗議文が、××郡週刊記者連盟とか××市記者クラブとかという連名のものが相ついで殺到、事態まさに重大、私はインターの声みちる甲板上に上り上りつた船長のような感慨に捉われた。

しかし私は毫もひるまない。悪質な一部週刊紙の目に余る所業はかかれてのこと、投書、犯罪、町村長会の決議文など、戦後の言論の自由に乗乗したエセ新聞人に対する所業への反撥はかかれてのこと。一面このような事態の発生は、私のこうした持論に対する相手方の、かれてからの情調でもあったのだ。このことは私が支局長を勤めた一市二郡の相手方がより過激で急先鋒なことで判る。私は敢然と社説と時評らんで反撃した。かくてこの騒ぎは地元週刊紙代表四名の酒氣をおびたなぐりこみで頂点に達した。

「やめろ、新聞人の仁義に叛くとは何事だ」と一人が怒号して湯呑をなげつけへいれけによつた一人は胸ぐらをとつた

「プレスコード違反だ」とわめいた。プレスコードとは一体なんぞでせうかれ、とさる宴会で私にきた憲兵准尉上りのその男がである。かくして私は社長室に呼ばれた。

喧嘩沙汰のフイナールにはヒロイズムの義感が残り、あるときには情緒もあるう、だがことごとくにおよべば、靴底に置くヘチマのしんをそのまゝ口の中に押しこめられたようなものである。

結局私は退職を決定した。

「貴方の社長のことを川柳の一件でボロクソに書き、出席柳人の意見を大きくとりあげていたが、私の言つたこと、全くちがうことを書いてゐる、語るに落ちるとはこゝまでくればもう沢山です」

とそのとき文庫氏が言つてくれたが、編集局次長兼報道部長はすでに机の中をゆつくりと片づけはじめていたわけだ。このことなごから郷里四國から昨年岐阜に轉住してきてゐるが、里に帰つた妻は、いまもこう靜かに言つてくれる。「父ちゃん、だから川柳はやらなければダメよ。こんなことで川柳を止めることは、お父ちゃん

んが、本當の川柳人でない。そういうことになるわ」

その言葉に私はいつもニヤリと笑つてこゝろ答へる——。

「心にきここののはかな」

(昭廿六・五・廿七)

お知らせ

第四路路師旬刊建設記念川柳大会の写真が出来てゐます。岡山縣和氣郡吉永町福満、浜田久米雄あてに、代金三〇〇円(手札型各一枚送料当方負担)を添へ申込んで下さい。

(A) 除幕式後の集合撮影

(B) 句碑と路路先生

(C) 句碑だけ

川柳雜誌社備前支部

新刊紹介

▼山沢英雄氏校訂の「諷風柳多留」第二篇(全五冊)が東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地株式會社若波書店から五月廿五日に刊行。(定價六拾円)

一品料理と生そば

ザリル 芝鶴

上六キヤビトル映画館 東三軒目

耳鼻咽喉科 牟田病院
院長 牟田哲三郎(一哲)
大阪市南区長堀橋交又点西・電話船場五〇〇〇番



選郎路

行倒れ片手拜みに見て帰り 廣島縣 黒本 芳泉
 老妻に便る余生の又愉し 同
 日暮れから着飾つて出る身とはなり 同
 エロに触れグロに触れ酒面白し 同
 寝に帰るだけの夫にすねてみる 同
 六祖傳に通訳少し戸迷ひて 會敷市 木村千代男
 御手洗されまうだけがこの騒ぎ 同
 留守番に往く妻留守がきにかゝり 同

マ元帥

解任の特報板に腫がうるむ 同
 間借する身は犬のごと猫のごと 東京都 石居 高志
 さて出来てみれば子供は早かつた 同

國電機本町駅構車(二句)

酔つばらひも六三型は避けて乗り 同
 國鉄の赤字こゝから又生れ 同
 神戸港ゴミもあちらのものが浮き 貝塚市 板東法界坊
 左様なら霧の港の灯がにじむ 同
 看護婦に叱られてる生きてゐる 同
 平和な日金利も知らず送つてゐる 和歌山 秋月 宏方
 一頁読めば眠むたい暖かき 同
 ちと多いチップ覚悟をして貰ひ 同
 黙殺と無言の行で浪立てす 愛媛縣 渡辺 曉童
 あきらめた事をきれいに書き送る 同
 諸行無常と三味線もなる 同
 我党になつても同じ生活向 今治市 長野 文庫
 舶來の古着へ足が短かすぎ 同

孝行へ邪魔な労働基準法 同
 公園の狸は子守歌も聞き 高田市 岩垣日本村
 別荘で瘦せて居るのが次男なり 同
 知事さんを呼捨ててはアルバイト 同
 御化粧はクリームだけの妻となり 石川縣 那谷 光郎
 アルバイト日に二百円の声がかれ 同
 失恋の死ぬ氣がルージュ買つて來た 同
 精進日母代表でしてくれる 和歌山 浅川 桑南
 バスの隅父と他人の様に揺れ 同
 齒科え行く健康保険羨まれ 同
 死んだ妻母が燈明あげてくれ 大阪市 横田 方眠
 資本主義あれで奥様にはあまく 同
 銀行へおつとめと云ふ御家柄 同
 追風に得をしたよな歩きぶり 芦屋市 後藤 志津
 事務的な態度に変わった妻の意地 同
 ロボットに過ぎぬ空似の恋をされ 同
 織姫と言われ寄宿に寒う寝る 兵庫縣 吉原 紅月
 立退きをして迄誰の観光路 同
 立候補して露路迄も足を向け 同
 春風に名も無い草も花が咲き 石川縣 山田 陽々
 空返事妻新聞をとり上げる 同
 期待せぬ孝行に親の眼がうるみ 同
 これほどに頼むも巡査手帖出し 岡山市 平岩 作州
 見逃して呉れた巡査の背を拜み 同
 還暦は來たが借家に住んでおり 同
 用件は袋の中にある使い 愛媛縣 村上 和子
 女二人どちらも好きで寂しがり 同
 恋人もない旅好きの本をよみ 同
 振袖に似てアメリカへゆく金魚 京都市 村本 小石
 病やゝよいらし慾なことを云ふ 同
 アルバムの中にも母は僕と居す 同



秋春筆雜

牡丹々々

安川久留美

みんな出てしまつて又私一人が留守番になつた。靜かだよ。然し外は鼻月晴れ、鍵をかけて枕と仲よく散歩してもよいのだが、目的なしでは仕方ない。まゝよこんな時句作でもしよう。万年床にごろ寝するがなか／＼作れない。四十年此方、もう川柳想が頭をぬけて空っぽになつたのかも知れぬ。然し川柳誌を見ると私と同じ年輩の人が創作を発表している。私だけの頭がにぶくなつたのだ。

大輪の牡丹を圍らしく見せと美しいところを詠んでみた。が、何だか川柳として物足りない。單に牡丹を説明しているやうなものだ。かつて、白田照浪さんが

牡丹々々紫煙流し行く

とかいふ句を古い「石楠」に見たことがあつた。俳句となれば絵のやうにどんな美しくても構はない。然し川柳を美しく詠むには一寸苦心がいる。牡丹などを句にしやうとするのが、大体ムカ。昔の俳人ていへば蕪村などの独じり落しか知れない。川柳人は夢々、牡丹の美しさを夢に見ても作ることは考へものである。

一寸一杯お馴染らしい露の露

共学でない学校を母選み 京都市 井上 吉造
表彰日名物男てれてをり 同 同
ロマンスもあつた共学今日卒へて 同 同
傳來の軸この没落を切抜ける 愛媛縣 堀内 曉風
此波に闇で儲けて紳士録 同 同
夜櫻へせゝらぎの音三味の音 同 同
四月馬鹿詠ぶる結果になろうとわ 出雲市 久家代仕男
一匹の魚籠へ淋しい陽が沈む 同 同
苦笑して居ただけなのに疑われ 同 同
騒音に感覚もなくモク拾い 長崎市 山崎 虹介
恙がなき暮心中批判など 同 同
生きて行く怒号か朝の市の声 同 同
赴任した山はこれから花盛り 愛媛縣 米沢 曉明
独り者泊れといえはすぐ泊り 同 同
靴みがき父は中氣でねています 同 同
老らくの恋見送りに行きたがり 布 咄 滝 純香
坊さんに陽が強すぎる花まつり 同 同
神様にお願ひをする程惚れる 同 同
会社では祕書宿帳へは娘 新潟市 伊藤 蘇子
新婚へ切符重ねて切つた音 同 同
釣り銭で女房へ買ふ氣バーを出す 同 同
正直の最後一家心中で抗議する 愛知縣 兼元 冥兒
正直を賞めて税務署負けもせず 同 同
当選をすれば政治家氣取りで來 同 同
候補者は女の票のこわさ知り 大阪市 佐野 牛歩
もう妻は尋ねもせずに投票し 同 同
三合を云わす今度は税のこと 同 同
汗もなく儲けた過去の忘れ得ず 奥市 松永四季無
ハワイから忘れてゐない金のくる 同 同
一二俵出して米屋は火の手見る 同 同
三十年勤めましたと家を建て 岡山縣 井野 格一

出戻りか又出稼ぎか燕が來 同 同
果物屋あはれバナナが黒うなり 同 同
金も金だがと体を考える 愛媛縣 村上 旭堂
そちらまかせでなと抜目ない男 同 同
いたどりを折れば子供の頃の音 同 同
先生の若さへ女学生騒ぎ 荒尾市 山崎青粒子
無口過ぎ頼りないわとあかれて來 同 同
代診の度胸望胎を引受ける 同 同
祝結婚
手間取つた化粧機がさつと開き 岡山縣 岡田 夜潮
泥酔が勝手許までやつて來る 同 同
永居して菓子一つ出る氣配無し 同 同
提灯屋座るとこだけ残しとき 岡山市 坂井 三葉
園体は別の方からは入らされ 同 同
蛇が出て遠足の足又乱れ 同 同
物好きの終にパチンコ屋を始め 東京都 松井 蛙声
すみれ草こゝは戦花に遠く住み 同 同
未亡人だから此の店よく流行り 同 同
酔うた声表で呼んで裏で呼び 岡山縣 水田 草骨
二人が同じ老眼鏡ですみ 同 同
昔より貧乏までが派手になり 同 同
けしかける様に弁護士法書繰り 長野縣 高峰 柳兒
絵ハガキの雨の旅愁を書き泥ませ 同 同
手遅れへ医者そゝくさど抱閉ち 同 同
宵寝すりやすうでお袋又案じ 大阪市 東 喜久堂
一服をしてそうな所ラムネあり 同 同
脱ぎ捨てた姉の着物をまどうて見 同 同
看護婦にお礼を云へば職務です 京都市 佐久間折草
心配をみな引受けて女親 同 同
将棋にも大人の世界子の世界 同 同
可能的限界心得てゐて水臭し 大阪市 山本 葉光
苦笑さす子供の批判鋭すぎ 同 同

蓮華畑

広瀬志津雄

牡丹の露も美しいが、人間胡蝶のひげに見る露も美しい。麗のれんをくぐつて、手製な料理に一すべい。川柳はやはり人事をふくと妙味がある。諷刺も人事から生れる。然し俳句の方が川柳島へ侵入することは自由である。

さて、やつと二句作つた。それも何らししい句作でなくしてお洒落しい。作れぬときは、他人の作品を片ッぱしから読破するのによい。

川柳大阪の五月の表紙に、美しい二色刷の牡丹をかけた。路郎さんの題字と相俟つて頗るいいコントラスト。路郎さんの字はどれもいいが、特に「川柳大阪」はよいやうだ。何といつても地元の大坂を愛しているからだらう。

月の明るい夜はよく相合の男女が月見の場所にする所であるが、悲しいかな二人の寝た通りの形が翌朝の露の下でその儘残されてゐることである。

田園はこの蓮華畑が宛かも東京の銀座や大阪の心斎橋通りと同様に心浮かれる場所となつてくるから珍妙である。

心氣澄み渡り、心靜かに愛の契約を結ぶところとして立派に役割を果たすから妙である。

別に私がその當時者ではなく、むしろ私はその場所の発見者の方である。

二人の胴頭脚の形まで、肥腹の区別まで判きりしてゐるのである。

靜かな青い月の下では、決して都会の柳人とても何とかしんみりして來たとてがめ給う勿れと言ふところである。

盛装の金の出どころも見つめられ
女房をほめたで母に叱られる 今治市 同
賞品はこれと一本さげてくる 柴田 青雨
心安き祭りも耐にしていまい 同
轉落の眞似事したい娘二十 大牟田 同
習性は安い野菜の手入れをし 同
末席は勝手に飲んで酔つばらい 同
飲めるだけ飲み脳溢血で死ぬ 熊本縣 同
若いのネ若いのネエとお酌する 岡本 昇月
お土産は仲居の歌とマツチです 同
借用に及び盛装出来上り 大牟田 同
うちの子がラヂオに出る子供の日 小川 青泡
眼帯の裏まで五月の青さ込む 同
借りた傘いかい荷になる虹の橋 熊本縣 同
またビンゴかと許嫁見えかくれ 西野斗四翁
解禁の鮎さん然と夏が来た 同
良妻と云はれかつぼう着の白さ 米子市 同
塵だけは余所に負けない程溜り 小西 雄々
幸福とはつきり云はず笑顔みせ 同
カレライスを思わすや春の泥堺市 同
エロ雑誌氣軽う買ふも駅の店 丹波 太路
殺生に見へよが掟通りなり 尼ヶ崎 同
横ばいと言ふ榮轉をうらやまれ 赤木 紅山
あの年齢で未だ腰弁の朝を行き 大阪府 同
ごみ車ボウ／＼髭もよく似合ひ 森本黒天子
アベツクでするパチンコはやかしい 宇治山田 同
パチンコは此の世の憂さの捨てどころ 松森 卯門
クレーンが霞み出島はまた時雨 長崎市 同
わびしさは濡れて聞えるアンゼラス 北川 史風
飛行塔サクラの花の上を舞い 貝塚市 同
無関心な顔して娘手をとらせ 河楊 梵鐘
税金が恐くこんなに儲ける 京都市 同
失業ヘスキ鍋裏を見せたまゝ 若狹 狂風
候文の冷たさ拒絶する手紙 貝塚市 同
多炭 若柳

入学の前に巻一皆覚え
娘の歳を問へばフ、ンとこまかき 貝塚市 同
痴話喧嘩子は父につき母につき 中尾 彬光
大都市のごみにまゐりて小さく生き 宮崎市 同
男など物の数とも思はざり 野口卯之助
正直に申告すれば税重し 愛知縣 同
デパートは宗教さへも商賣し 岩瀬 雨蓮
見栄はつて出した茶菓子に子 岡山縣 同
病床の身にサイレンが淋しすぎ 水谷 谷水
山の中誰がみているもんかさあ 徳島縣 同
時の人はいつもハンカチだけは新 廣瀬志津雄
孤独とは悲しいトンブク服で 萩市 同
母去つた故郷つまらぬ土地に見え 多田 穂波
バツヂ一つ付け度い丈の立候補 熊本縣 同
愛情の下手を夫に信じられ 鹿本 実信
どさりと身を横たは今日が済む 廣島市 同
息をするのに何とせられ金魚たち 米谷 巖
親切が仇に成つたり妬かれたり 岡山縣 同
純情を踏みにじられし礼がへし 小林 鳴子
泣くこともおぼえ女になつて居り 貝塚市 同
注視の眼がんとはねつけ手錠ゆく 岡山縣 同
社長の子が同級生で氣が疲れ 田垣 方大
資本家と云ふ柄でない小心さ 同
朝の街屋汚なく眼にうつる 石川縣 同
お隣は会社勤めの置時計 塩谷三思楼
悲しみをギターに托しうつたえる 岡山市 同
遇ふ度に物價トウキを家主云い 山本 焦兒
前後賞無い時一番違ひとは 岡山縣 同
やんちゃな娘帰れば恐い母があり 大塚美能留
只ついて来て欲しい妻のお買物 貝塚市 同
あきまへん変りまへんで退院し 香木凡太郎
出世を望まず端の机に居 倉敷市 同
連れてつた子供のほうがよけ釣り 野田素身郎
愛のない結婚でしたとけりをつけ 出雲市 同
原 一月

飛★燕★往★來

福田山雨楼氏（横浜市）より

路郎宛

啓 六月多拜受、全く涙のこぼるゝほど有難い。うれしい事です。こんなに正確に堅実に出版されることは何と云つて感謝してよいか言葉がありません。先生はじめ皆様の御骨折御健闘に對し厚く厚く御礼を申し上げます。先生の第四句碑の玉吟を拜して非常にくれしく存じました。

小生もかねてから感吟歌服していた名句でありました。句評の閑秀作家の堂々たる文章を拜見して非常に敬服しました。今迄試みられなかつた企画であると同時に、とても行届いた鑑賞振りでありました。先生の編輯室にて「輯」の字がよくありましたね。は名隨筆、これまでの先生の編輯後記だけでも優に立派な隨筆集ができると思ひます。先生の隨筆集も是非出版されたいものゝ一つ。小生その後引続き安靜休養にとめておりますがお蔭さまで好調、寝てゐるのが莫迦々々しいほどの氣持であります。（以下略）六月一日

須崎豆秋氏（大阪市）より

葭 乃宛

啓 突然の「讃岐めぐり」で本社句会を欠席してすみませんでした。一行は十人でしたが、屋島上山では駕籠を一挺やとつて駕籠かきのおつさんには歩いて貰ひ、一行が、かわるゝ駕籠をかいて、ぶらりぶらりと道中しました。駕籠かきの法被を着込んで、れち鉢巻で駕籠をかいての私の雄姿を写真に撮りましたから、いづれお目にかけます。金比羅さんでは、丁度若葉の盛りで、すぐ鶴足さんの、

嫩葉ふさ／＼金比羅詣りしたしの句を思ひ出しました。佳い句といふもの

この鏡台十九の春に買ったもの 雲湧きて池の俄かに殺氣めき 京都府 同 奥村 文柳
包装のきれいなメイド・イン・ジャパン 領收証律義男のしまいやう 鳥取市 同 森本法泉水
小切手を女細かく疊んで來 極道をすれどやつばし男の子 奈良縣 同 大森丙子朗
勤め先子に明かされぬ母であり 待ち呆けて夜の女に火を借られ 貝塚市 同 芝 無骨
肺病と差し違えする氣の手術 路地裏の正直者が見る世間 佐賀縣 同 中村 魚灯
猫抱いてサンマ・タイムを畫寝する 母の日も矢張り母はくたびれる 愛媛縣 同 八塚 紫呂
惜しみなく與えて女墮ちてゆく 節約もかみそりの刃の切れぬ事 和歌山 同 岡崎 泰三
高給の未練晩婚なぞ思ひ 恩給をもらひかつぎ屋にもなれず 岡山縣 同 葉山 縁二
焼酎になれて貧乏板につき シベリヤの方へ飛んでく雲を見る 京都市 同 松本 超然
電柱に縄一本を頼る人 退院の父に馴れない子の素振り 京都市 同 若山 圭草
情緒とは余りに遠い海の荒れ 温泉郷ダンスとてらを着たまふで 大阪市 同 三木 泡起
修学旅行我に覚えのあるものゝ アベックでおいでと白浜湯の煙り 吹田市 同 橋本 幸男
会長にあんな人でもなれるのか 朝起きを嬉ばすもの蓮の音 京都市 同 鈴木加代子
墨の香にもうアトリエは夏となり 若葉だ一駅歩きましよう 大阪市 同 西川 恵風
長女就職
働くのも面白いわと言つて呉れ 夢にまで税吏のやつて來るなげき 高知市 同 岡本 元馬
貯めること知つて女の色氣なく もう他人ではない言葉遣いなり 貝塚市 同 上坂 朱人

湯加減に義江の歌も出る若さ 貝塚市 武安 嘉彦
民主選挙ボスがやつぱり当選し 玄海のかもめを連れて入港す 貝塚市 宮本 甲馬
妻というものは反省きらいなり 高校生活になつてスカートの寝圧もし 岡山縣 末房 至孝
煙突娘ふと用便が氣にかゝり 愛知縣 本多 柳人
キャンデー屋選挙運動と間違はれ 妻の不機嫌触れゝば酒の事が出る 高知市 松下一徹郎
正直を賣物にして老ひにけり 愛知縣 尾崎 久平
私有財産認められたで精を出し 金篇と糸篇煙突立ちならび 愛知縣 津川 竹坊
バツトの紙のべて轉宅書いて呉れ たけのこわかめ札所参りの不景氣な 出雲市 野村 岬月
オリオンズ野球團を迎えて
レイにフラ野球使節の満足し ホノルル 長田 大彦
氷屋の前は涼しくさへ思へ 見送りへ素知らぬ顔で二号のり 見分に分けたつもりがもめて居り 日曜日安静もちと休みたい 永床に母はようやく折れてゐる 久々に訪へば恩師は孫の守 壁にもたれあひの娘の瞳町を恋う 一枚の虚栄に二三賣とばし 苦学とは言はず朝刊アルバイト 損なたち味方で無けりや敵にする 出産へ夫うれしい氣をつかい 故郷へ帰るかばんへガムも入れ 朝の内来いと社長は煙草吸い こんなのが逢引きかしら倦怠期

は、空んじてしつかり頭に残っているもんだと思ひながら、濡るゝやうな若葉の金比羅を満喫いたしました。
先生、P.O.E君、梨里さんへ何卒よろしく敬具。六月五日
前田伍健氏（松山）より

「川柳雜誌」六月号拜受、あつく御礼申上ます。句碑建立式の盛況は我が事の如く、否な柳界全般の喜びにてうれしき限りであります。本月の表紙絵は近頃の逸品です。又た山雨楼さんの論説も堂々たるもの、敬服と共にその労を乍ら感謝しております。
富士野鞍馬氏（清水市）より
路郎宛

四回目の句碑建立まことに結構なこととおめでとう存じます。川柳道の心強さを覚えます。拙祝吟一句獻上致します。近く東京へ移る計画を進めて居ります。向暮御自適祈ります。六月二日
句碑建立を祝し
仁義祝智信路郎
に骨がある
鞍馬

大島壽明氏（熊本市）より
社宛
六月号拜受しました。承れば第四回目の句碑が出来ました由慶賀に堪えませぬ。又阿部義雄先生の「蛇の目」の紋、頼田山雨楼氏の川柳の眞理面白く拜見しました。先は御礼まで。六月四日

山王
妊避のたに
サンデー
セツト 250円
セリ 200円
同上 50円 180円



川柳加藤蛇の目紋 (二)

阿達 義雄

(三) 蛇の目紋

蛇の目紋を清正又は清正の事蹟の縁語として詠んだ句が可なり多くある。之も矢張り、蛇の目紋の変態句と考ふべきであらう。加藤清正が蛇の目紋であつたればこそ、それ等の縁語仕立の句が作られたのであるから。

『守貞漫稿』の「第二十八編食類」に「三都とも押餅なりしが、江戸はいつ頃よりか押ししたる筍餅廢し、握り餅のみとなる。筍餅の廢せしは五六十年来漸くに廢す也」とあり、餅筍の図を示しその説明に、「この筍の中に飯を入れ軒石を以て押しして、後に之を切る」と記されてゐる。蛇の目だぞ餅に成るなと下官共

(五二編)

清正(蛇の目)だぞ、餅の様に押し殺されて了ふなどいふのであらう。

朝鮮で押のきいたは蛇の目餅

(出所不明)

右二句の「押し」は、即ち「圧

し」を利かせたものである。唐人はみんな嫌ひな蛇の目すし

(五六編)

蛇の目餅喰つて唐人反吐をつき

(六二編)

蛇の目と名がつけば異國に嫌はれたのは朝鮮役以來の因縁である。

おだやかき清正鮮の見世を出し

(五四編)

太平の世ともなれば、清正も花見の蛇の目すしに關連づけられて、かすかに人の記憶に残つてゐるばかりである。

(六四編)

この句は七八編、九七編にも見える句である。

(八二編)

此の割土間は「守貞漫稿」に「小人数にて一席を買ひ得ざる時は、他の人と同席すること也。或は同茶屋の客に同席するものあり、或は茶屋も異なる客と同席するもの、わりこみと云ふ。凡そ一席七人を法とす云々」とある割込に相当するものらしい。今、割土間を詠んだ句を参考までに示してみよう。

わり土間は七八人を一たびね

(五五編)

井田ンとしやれて、ホ備者割土

(九八編)

三立目はまだらに眠き割の土間

(一三四編)

割土間は四角にひざくたがれる

(四八編)

子を膝へかけこに入れる割の土間

(一五四編)

添作のころに二一の土間は割れ

(九五編)

土間は一坪一分で四人詰である。最後の句は土間に一人多く這入り込んで五人となつた爲に、割土間同様になつたことを言つたのではないかと思ふ。割土間は安席であらう。

「清正の礼に虎」とは、この割土間の込み連中が他の人から蛇の目餅を貰つた礼に、虎屋の餓頭を礼にやつたといふのであるが、上記の割込や割土間の引用句によつて、蛇の目餅が廉鮮であつたことが推定されよう。

本くらげも是非這入つてゐる蛇の目餅

(八二編)

蛇の目と耳とは縁語。きくらげは木耳と書かれる。之は耳に似た恰好だからであらうこのしるの首数をとる蛇の目餅

(九二編)

この「首数を取る」も蛇の目の縁である。

厚焼の耳塚をつく蛇の目餅

(一一〇編)

右は皆縁語仕立の句である故そのまゝ、解釈しようとするは無理が生ずるが、之等には鮮

の製法の連想が若干ある様に思はれる。「守貞漫稿」によれば、餅の材料としては、飯と酢と塩の外、椎茸、木茸(きくらげ)、鶏卵焼、鯛の刺身、あはび、車海老、海老、そばろ、白魚、まぐろさしみ、こはだ、あなご、海苔、干瓢、山葵等と記され、その價は大略八文で其中玉子巻だけは十六文ばかりであつたといふ、尙、蛇の目餅と言つたのは、加藤紋と同様に、その切口が◎になつてゐたからではあるまいか

(四) 蛇の目傘

雨やごり清正を買ふひんのよき

(四二編)

清正は蛇の目紋、従つて右句に「清正を買ふ」とは、蛇の目傘を買ふことである。蛇の目傘が番傘など違つて品の良いことは周知のことである。「嬉遊笑覽」に「天井ばかり青きを紅葉といひ、ぐるりの青きを軒青と云ふ(俗に蛇の目)」とある。従つて之も青色で蛇の目を形成してゐるからの名称であらう。尙、「守貞漫稿」に、「元祿以來中央青土佐紙、端周りも同紙、中間白紙張、是を蛇の目傘と云ふ……價凡二米、今世武士稀に用之、僧医専ら用之、婦女は三都貧富ともに用之、若て青紙の処には黒漆を塗る」

婦女子が多く之を用ひたこと

は、

花ぐもり嫁清正を供につれ

(三二編)

嫁の供清正つれる花曇り

(八六編)

清正の討死をする大あらし

(二二編)

花曇の日の花見には、蛇の目傘の用意が必要である。蛇の目傘で春雨にでも降られるなら粹な風情にもならうが、大嵐では開き切つた茸の樣になつて流石の清正公(蛇の目)も討死といふ処である。

いやな傘朝鮮で鬼と言ひ(六〇編)

唐人は傘を見て震えてる

(一一九編)

何にせよ、朝鮮では清正に縁ある物はみな憎まれもので、粹な蛇の目も台なしである。

蛇の目傘さす助六も出はかとう

(一〇九編)

助六には紫禁巻や蛇の目傘はつきものだが、歌舞伎十八番の一つ、助六の出端に唄ふ河東節、之もカトウ(加藤)なら蛇の目に縁があると言はれよう。

河東ぶし蛇の目の紋と知つたふ

(一〇六編)

河東も加藤も区別のない文盲なら、或は言ひさうなことであり、又、江戸つ子らしい、つまらぬ洒落でもある。

清正をさし頼朝をはいて出る

(一〇八編)

清正とは蛇の目傘。頼朝とは外法下駄。清正と頼朝との名合はせたいな句であるが、之も紋章を間接的に詠んだ句と考へてもよからう。(終)

の洞朽不
室煙喫

ジープ云を事いたひ云
(順着到)

高田抱逸

長女律子は市内の三井社員へ、次女陽子は函館の甥へそれぞれ五月十日に嫁入つた。私一家にとつてこれ程の御日出度いことはない。姉²²。妹²⁰。

芽出度くも腹つくかせて二人嫁
し財産をはたいて娘よろこばせ

路郎先生の一面

友淵貴山

川柳雄誌社京都支部復活句會の
帶途、西院駅から乗車、立ちづめ
でやうやく梅田駅に着く。満員の
地下鉄電車をやうく過して疲れた
身体を次の電車で座を占むべく先
生、一杉、私と行儀よく前列に並
んで待っていた。処へ厚顔しい一
洋服男がツカ／＼とその前へ来て
平氣で立つている。先生が物靜か
に「僕らは以前からここに並んで

をたれる。先生が遂に大喝一聲
何と言はれたか入つて來た電車の
響音でかき消されたが、先生のあ
の威大なる力で無礼者を線路へ突
飛ばしはしないかと電車が丁度入
つて來たときだけにチヨツト心配

した。と言うのは十八年程前、戎橋筋を先生と私と通行中街のゴロツキが喧嘩を吹きかけてきた。ところが先生は柔道の一手でゴロツキの胸ぐらを取つたかと思うと寸秒の早さで、見事コンクリートの道路へたゝきつけたからである。

路郎先生は柔道も角力も学生時代にやつていたと聞いたが、余りの見事さに私はなす事もなく見とれているばかりであつた。今その先生の英姿が先生、一杉、私と腰掛けてゐる地下鉄の中へまざまざと浮んで來た。

貴山クンに

不朽洞主人

トンダ武勇傳を發表せし、いさ
さかタジツのてい。小生の正義
感がバクハツしたものと。ア
ノ時には君が見ているとは思
なかつた。橋筋の交番の前だ
つた。なけると同時に、ブン
なぐツて、ドギモを抜いて
おいて首筋をつかち、二
んで交番へ來いと云つたら
もなくあやまりよつた。ア、
云うのがす劇と云うのだ。イ
ヤ、隣劇と云うのかも知れな
い。雑間地では、間髪をいれ
ない行動でないと、変な相棒
が出て來て、逆になぐられた
りするものだ。豆秋に云われ
たら先生は武勇傳にかけても
八段ですと云うだろう。豆秋
に見られなくてよかつた。

娛句樂さんへ

須崎豆秋

岡山から帯阪の車中、西大寺あたりでフト「急行の窓からチラと句碑が見え」といふ句が出来たのはよかつたが、肝心の吉永駅貴宅

前を通過の際あんまり汽車が走りすぎて、とうとう句碑を見落してしまい、折角の名句を没にしてしまいました。(五・二二)

淺草綺譚

龜山晴峯

ストリップの大家晴峯ロツク座
を出る酔眼矍鑠タ、キ賣の前に立
つ
晴峯「おいこのバンドいくらだ」
タムキ屋「四百五十田本牛皮一枚
もんですよ」

暗室一よし三百円で買った」
 タ・キ屋「ヘイ有難う」
 てな勢いで買った本皮一枚ものの、
 ハンドを持ち帰って宿で締めて見
 てビックリ開廻りが何んと普通の
 より十センチ程短かいので、鑑で穴
 を二つあけても腹に食い込む仕来
 りのかわり同じタ・キ屋で買った
 フトカラー十五時がきて首にあつ
 た時十五時半のもので二度ビツ
 クリ、あふ夢々御酒の上の買物が
 けはつ、しみ給え。つゝしみ給え。

好きなもの

田邊由布

「季節」の美しい日本料理にうまい酒」これは私の好きなものの一つですが、それよりも、机の上や枕元に好きな本のあるとき程楽しくうれしいことはありません。机よりも枕に親しんでいる今人の私には、好きな本はこよなき友であり、さびしい私を幸にさえてくれます。

その一つ「川柳雑誌」――。

左り書きの事で

岸南柳

云々、たい事が云えるページが
出て、食後のタンサン飲だ氣がす
るので、申させて載せます。
「川柳雑誌」を愛すが故かも知れ
ません。先輩よお許しあれ。

編輯の事に就て申させて頂きま
すが、日廣告主が指定された廣告
は、近畿日本・アベノ近鉄・タチ
カワネ・サンシー・セリー・メタボ
リン、其他左り字・川柳雄誌社と
しての校正は、不朽詞の喫煙室、
一路集、阪田商会、私達のグル
ブ、勸静、同舟詠詠等の編輯部
におまかせは有書きてしょう？

か出来ぬものでしょうか？

新川柳講座の外語引用句の所に、時代の流れに相應し事は許されてあります通り、何とが出来たと思ひます。そう思ひます事はね、五月号の表紙に、五月号と左り書きに校正されてありますから見て、先輩諸氏又如何でしょう。

三
人

水谷鮎美

とう鳴りえたつ三人の初夏のうみ
うつくしき陽に燦爛とはれるあゆ
しあはせをいちごに引た若きま
ゆめも夢ゆめをうれしく侘すま
うるさき人々の巷にたばこすう
もの好きな三人に寄てくることも
うつかうと踏む三人え路のとう
むこ三人影はうれしさに消ゆ
あいごんの瞳に愛人がうつりぬし
ゆうぐれの卍灯に美しくうなう
みかづきとそれ柳魂の三人と

われもし女(男)なりせば

福田 妄夢

哲水ニ競馬競輪マニヤ社長の美人
秘書

正司 素晴らしき二つのオツパイ
を持ちたいわ
晴峯 男ごとくを悩殺せん
野介 〇〇〇〇まだ〇〇は〇〇〇〇
〇〇〇〇(来字ニナシ)

貞女（伏字とて美し）手拭を腰に飄々として歩か
ん

豆萩^ニヨイトマケ土工
妄夢^ニあゝ男になりたいなと思ふ
でがしよ

ニキビ
にきびとり
美顔水
桃谷順天齋

瓶の銀山

大坂市大淀區長柄
西通一丁目四四
銀 株 式 會 社
電話堀川四四七番



詠史川柳

につぽん (10)

戸田古方

封建社會(五)

(四十一) 交 通 (十七八世紀)

箱根の関所と大井川の川止めを過大視しすぎているが、中世の関所とくらべると比較にならぬほど交通は整備された。陸の東海道、海の瀬戸内ををつなぐ淀川の河上交通を中心に五街道、日本週辺をむすぶ航路など。

ほめ足らぬ富士がまだまだみえてる
御開所がみえなくなつて盡にす

助郷のこんな先祖がうらめしく
(註)宿駅の補助人足を負担する村、こうした労役は村人を苦しめた。

夜船もう螢がついでこなくなり
(四十二) 蔵屋 敷 (十七八世紀)

大阪の堂島川、土佐堀川をはさんで今ものこる蔵屋敷の名残、全国の大名は大阪に蔵屋敷をもち、蔵役人と掛屋の談合の場所として発達した大阪の遊廓、旗本相手の江戸の札差とともに大阪の掛屋、十人両替の名は高い。

長持へ入り切らないお墨附き

丸腰でくれば堀江の灯がうれし
身ごもなどいっている間にしてやられ

大名の所帯へ甲乙丙をつけ
借上がきまつて立てる早飛脚

(四十三) 特 産 (十八世紀)

心ある大名は自力更生の道を産業に求めて特産を奨励した。今にのこる全国の名産は大いていこの時期にととのえられ、武士自体の中で太平の無聊と貧困の救済を家中工業に求めた。工場制手工業の発達もそれにともなう。

名君は惣百姓の智慧もかり
君命の通り漆の値をしらべ
アムステルダム絵の長崎の土産もの

奥向きの方へも家老朱を入れる
御城下の恩顧は色をつけて買い

(四十四) 浮世 繪 (十七八世紀)

太平の結果は大眾も藝術を考へる。鑑賞の藝術として浮世絵がとり上げられた。あぶな絵もあぶな絵以上のものもすい分作られたらしいが、それを見ることで養われた笑いから純正藝術へと眼はこえてゆく。

大津絵の地に氣品がありすぎる
もう一寸まくり上げさす風が吹き

この辺はこゝろに富士をかいとおこ

歌麿として表情にまた迷い

(四十五) 川柳と俳句 (十七八世紀)

創作することの出来る大眾藝術として川柳があり、俳句がある。連歌から前句附と発句がそだち、各々川柳となり、俳句となつた。作品を通して大衆の心を知り声をきくことが出来る。

疎開して季節にふれる日の多く
絵馬堂の獻句ひろえは前句附け
仲人の祝いことばに句が交り

(四十六) 儒 學 (十七八世紀)

徳川時代が文治政治であることに文句はなからう。湯島に聖堂が立ち朱子学が官学となる頃には大義名分をさく改新的な氣分は影をひそめ。さらに実践派である陽明学が忠臣蔵の大石の師山鹿素行や天満焼きの大塩平八郎を生む。御隠居のものとすきでない楠氏の碑

伏字もせずに経世の済國の陽明学ちと返り点ちこたえ
救済へ蔵書拂うも學の道

(四十七) 國 學 (十八世紀)

万葉代匠記、古事記傳が眞淵、宣長によつて著されると日本を知らうとする学者の一

酒販用アイスクリーム用紙コップ
其他食堂用紙製品一切



特殊紙器工業株式會社
フタバカツ株式会社

大阪市阿倍野区晴明通一丁目
電話 天下茶屋 2302 2303 2301

群があらわれた。神話一つの考え方もそのまゝ信じるのがあるかと思うと白石のようにいちいち理窟をつけぬと我慢の出来ないものもある。

松坂の一夜にふれてゐるたより
正確なこともちよつびり地名考

(四十八) 心 學 (十八世紀)

これも太平の所産である。仁義礼智の筋金は町人の生活の支えになる。石田梅巖のはじめた心学は武家社会にあつた封建的主従制を町人の間にもしみこませ、奉公とはきみにつかえることじやといわせる。

三從にしたがいられる不肖の娘
義理人情當り芝居がもち出され
懷徳堂橋のたもとで会釈する

(四十九) 蘭 學 (十八九世紀)

鎖國は日本を目かくしした
が、目かくしし切れない世界

の波は長崎の出島を通して押よせる。八代將軍吉宗は洋書の禁をゆるめた。自然科学の驚きの眼を見はる若き日本の世代、おくれればせながら針の穴を拡大してゆく横文字の力。

今日よめた単語懐紙えかいて去に

波の高き竜馬はちとも驚かず
油絵も蘭語も出来て帝國する

(五十) 百姓一揆 (十八九世紀)

百姓と胡麻の油はしげれるだけしげれ、彼等は武士も町人をも養いながら最下級の生活にあまんじていた。だが農民が自覚した結果の百姓一揆も苦しまぎれのあがきで階級斗争にまで発展しない。

はりつけの覺悟で立てるむしろ

旗 竹矢來のそと題目や念佛や

一路集

街路樹 福田山雨樓選

街路樹は埃の中で春を見せ 拾石
 ビルの窓から街路樹へすく空想 鮎美
 街路樹も疲れているよ街の午后 杜的
 通勤の無帽に慣れた街並木 三思樓
 家主より古い街路樹枯れかゝり 藤波
 街路樹が盡きて此処から俺の村 紅月
 街路樹の一本ナツのように枯れ 芳泉
 街路樹へ米の磨き水かけてやり 葉光
 街路樹の青がつないだ新市内 曉童
 街路樹が助けてくれた借金とり 志津雄
 街路樹に綱を渡して香具師の店 太路
 ほろ酔いの人生柳町かごに 扇子仙
 街路樹にごこから来たか蠅牛 光郎
 街路樹へぶらり糞虫冬のみ えい
 街路樹の鐘にうつる二階僧 孤峰
 新婚の旅で銀座の柳も見 千舟
 街路樹の生木に泣いた日を 日満子
 街路樹が夏仕度さす店飾り 代仕男
 酒臭い息で街路樹抱きつかれ 芳仙
 街路樹の日抜きに茂り写される 曉明
 街路樹も糞性都市計画すむ 同
 街路樹え今年も燕腹を見せ 美能留
 街路樹の一つ一つにある希望 青雨
 拳骨に似てプラタナス冬に立ち 十九平
 街路樹の落葉おんじを舞い 齊花
 街路樹も風にさわめく計帳の日 陶王
 街路樹へ牛が鳴いてる夜明前 鉄兒
 街路樹を散らし遅れたバスは行き 卯門
 街路樹の下で画を賣るベレー帽 凡太郎

スピードを出せば街路樹飛んでゆく 満年
 歡樂が盡きて並木の肌を抱き 法界坊
 街路樹の枝に帽子をはねられた 高志
 街路樹の蔭で眠れば詩人めき 芦穂
 街路樹を馬がかじつたらしい痕 同

五客

出棺を待つ街路樹の笑い声 不二
 街路樹の見果るまでの影を追い 茶々
 街路樹はあひるモカの香アツと来る 梵鐘
 並木の葉落ちて金魚を驚かし 忠美
 新しい町へ小ちやい柳うえ 英子

三光

プラタナス國民性の枝となり 日本村
 プラタナスは街路樹として適格である
 が、その曲りくねつた枝ぶり、高く伸
 びぬ車屈などなを思い合つたとき、恰
 も鳥國根性に閉ちこもつたわが國民性
 を連想する。思索的な句であるが觀察
 が面白く且つ深い。

古い町古い通りにする並木 青泡
 題を活かして表現が巧い。しみじみと
 した感じの中に一抹のさびしさ、親し
 み、おかしみを覚ゆる。

遊廊へ続く櫻の最盛り 貴山

自由人權思想の幼稚な時代には公娼制
 度をあまり罪惡と思わなかつたが、そ
 れでも何か心にとがめるところがあつ
 て、櫻で美化しカモフラージュしたので
 ある。一面廊の情緒をそることに役
 立たせた。今日公娼は廢されたが、特
 飲街は依然として残つてゐる。そして
 櫻は廓の封建性を物語るかゝり、無
 心に咲きほこつてゐる。人間の世界を
 冷笑してゐるようでもある。

クーボン

市場没食子選

手を変えし廣告クーボン付ける見る 孤峰
 クーボン券いくらか安いパンに替え 卯之助
 クーボンの客え本膳通り過ぎ 卯門
 窮通の果のクーボン喜ばれ 千代男
 空財布クーボン一枚へばりつき 四葉
 切りつめた生活クーボンの数を数め 杜的
 旅行好き何時もクーボン利用する 悦子
 懸賞金つきクーボンが恨めしく 志津雄
 クーボン券買ひつきと云ふ男来る 芳泉
 社の慰安旅行クーボン券で行き 十九平
 クーボンのパンさうさんに飽きた 天貧
 クーボン券チツプ不用と云ひながら 治
 クーボン券券当箱に暇を出し 齋
 クーボン券明日持つて来る馴染客 代仕男
 クーボンの偽造アブレ名を高め 扇子仙
 机上論通りクーボン券採め 日満子
 クーボンで妻の好みに馴れる 然
 葉櫻も見てクーボンの旅終る 齊花
 クーボンが付賣出も派手になり 三葉
 クーボン券子供に馴染多くなり 拾石
 クーボンがもうなくなつた子沢山 調年
 クーボンは不平でる程世は静か 葵子
 宿直はクーボン券を持つて出る 茶々
 入院の財布へクーボン券も入れ 千舟
 クーボンが出て気軽に旅がいき 格一
 クーボンに日限のあまいまくし 丙子朗
 一家心中クーボン券を持つてみた 幸男
 クーボンのパンは戸棚で固くなる 凡太郎
 クーボンが余る別荘番の部屋 日本村
 クーボン券要りき品は別に置き 光郎
 クーボンの時とは別な店がまえ 敬
 子の土産クーボン券で事が済み 柳坊
 クーボンを残し休暇の子が帰り 曉童
 クーボンの客へサービシストを 忠美

五客

クーボンを添へて人氣を返し 忠美
 クーボンも残り少く家出の娘 山雨樓
 金へんにクーボン券がたまはれる 葉光
 老母連れてきたクーボンの消費が嬉し 鮎美

人位

クーボンで来て均一の世評を聞き 三思樓

地位

はくちん紙幣とクーボン券を出し 貴山

天位

クーボンで落合ふ女秘書の恋 鮎美

軸吟

クーボンで気軽に若いうちの旅 没食子

品質優良
タチカワペン先
 TACHIKAWA PEN
 タチカワペン
 タチカワペン
 タチカワペン
 大阪市東区豊後町四八
 立川商事株式会社

素人の悲しさ釘が又曲り
素人にしてはと但し書がつき
伴奏がつくと素人節がもげ
素人に貸して鉦をわやにされ
天麩羅の中身を聞いて手を伸し
折箱の天麩羅だけが邪魔にされ
天井が飲めぬ方へと廻つて來
二次會へ行く氣天ぷら食へ残し
この雨がたと／＼浮氣にせまい
浮氣したなと盆を持つて來る
月の出へ浮氣女の下駄の音
停年が來たのに浮氣やめられず
浮氣する筈奥さんが弱々し
葉櫻の頃の浮氣の二日灸
泣き寝入り僕の弱身は僕が知り
泣き寝入りする氣の夫物足らず
泣きの寝顔泣いて寝入った儘の位置
泣き寝入り女房にばかり腹を立て
泣き寝入り母の氣持がわからかけ
独身へどうにもならぬ雨になり
独身が言論をちと封じられ
原價まであつさり言うた君と僕

川 雫
大和支部 高田川柳大會(奈良縣)
四月八日 於 高田社會館
上田 翠光報

商店街・花まつり・手術・差向ひ
鈴蘭燈つけて何々銀座とか
人格を棄へて商店街を行く
商店街人出に映えて遣花咲く
湯の香たつ商店街も旅のもの
商店街着荷を店の前で解き
予算では買へず商店街を出る
しばらくは商店街の灯にみとれ
商店街道路へはみ出る儲けやう
放送をチダハダに聴く商店街
商店街向いの林檎轉んで來
カフエーだけ残して商店街し
風呂敷が商店街で重くなり
火の手今商店街のご眞ん中
商店街社民自共の選挙ピラ

三葉
九坡
草骨
豆秋
九坡
寬山
貴造
草酒
智津子
仙居
良兒

商店街春ともなれば春の色
子を叱り／＼商店街を往く
右ばかり歩るいちや欲しい物買へず
花まつり有情無情の雨となり
かけられた甘茶に釈迦は知らぬ顔
花まつり寺矣いし佛たち
花まつり肩の埃を叩き合ひ
甘茶のむきでうれしい花まつり
子をつれて子の云ふまゝの花まつり
我事のやうに手術を母は見る
指の先これでも手術とたいをが
極道の果し手術を冷やかされ
ゴシ／＼と骨を切る医者無表情
かばかりの手術女を寒がらせ
兄弟がよつて親父の手書きめ
誤つた手術に悔のある名医
應急の手當で手術明日になり
手術室付添ホツと外へ出る
同病の友へ手術の跡のみせ
家事裁判昨日の妻と差向い
差向い既に他人でない素振り
猫の子を貰ふ話の差向ひ
差向い近頃皺の目立つ母
差向い男の方がおれ勝ち
日曜のブランがもてる差向い
差向い愚め合うて愚痴になり
下駄箱に塵もとどめぬ差向い
差向いやつぱりお前の酌がよし
仕つくした苦勞語らぬ差向い
差向いスリとは知らず火を貸て
そんなもの小手術ですに判が要り
品行は手術の痕にかくれなし
手術から仲よしになる友一人
メスの音自分の命まかす普
默禱をしてメスを執る大手術
あの時の手術は云はぬ事にする
血を贈り恩師手術の経過よし
差向い初恋一寸じてくる

一 薔 豆 秋 蘆 左 門 福 助 仲 生 仙 居 白 香 翠 光 好 善 悦 子 仙 居 銀 々 善 治 かつとわ 凡 茶 翠 光 露 智 豆 思 善 一 思 翻 芦 良 兒 貴 山 声 蘆 伸 夢 二 秋 日 石 子 方 正

川 集 北大阪支部句會(大阪市)

四月十六日 於梅田 正法寺

ベంచి・頂上・輕裝・定紋・日高
素通り

ブラツトのベంచి廣告銅けてゐる
花疲れつつベంచిを見つけ出し
ベంచిいま斜陽のなかに人を待ち
はけてゐるベంచి搜している見合い
頂上の社斜に立つて朽ち
頂上で足から下は降り知り
頂上へ来た女學生の感嘆詞
頂上へのぼりつめても山は山
頂上でこんなうまい握りめし
頂上は入道雲がつかめそう
深呼吸して頂上えさようなら
お忍びと云ふ輕裝を写される
輕裝が引たつてゐる薄化粧
輕裝の手に手に折つて来た櫻
輕裝の此の儘旅に出なくなり
輕裝にまだちと早い花曇り
輕裝で行く夜櫻は宿の下駄
輕裝の方が歌舞伎をよく解し
牛パンツ子の虫籠を持つてやり
カメラだけ肩に大和の春を訪ひ
輕裝の大分ふとりすぎてゐる娘
梅田まで下駄ばきですませる
定紋のお盆も出して目出度い日
定紋をくすぶらせて三代目
定紋に恥じる慕しをまだつげ

てるのを
正司
水客
貴山
默平
彦三
香林
春柳
與可
讓
鮎
萬
正
笛
古
杜
博
也

東京をばと
灘一とすじ
アベノ橋地下映画食道街

梅里の店

大萬

★大万川柳(第四回)を募る
兼題「冷奴」 路郎先生選
締切・七月十五日 句数五句以內
發表・七月廿一日 (商店に掲示)
御投稿は大万宛・ごなたでも

定紋に縫あて配給麦貰ふ 鮎美
定紋の違ふ借落で夫婦くる 水客
定紋へ母に小さき見栄があり 傳也
定紋のふくさ目出度い足袋をはき 紫香
ビクニメダカ追ふも一人連ね 香林
雨の手ですくへば目高サツと散り 香木
花吹雪目高の群を驚かせ 天貧
こゝまでおいでと目高逃げ 六柳子
網の目の大きな目高あざ笑ひ 貴山
すくうだけすくも逃してやる目高 古方
鯉かんへ入れた目高へかほり 泰柳
素通りへメガホン名前ばかり云い 哲水
素通りを叱られもつて猪口もうけ 博也
右側を揉まれて知らぬ間に通る 默平
素通りの五六歩往つて首をまげ 默美
素通りの肩をたすきで叩かれる 鮎美
予定通り傳り素通の伝びを書き 水客
素通のジャン／＼街におぢりして 萬滴
素通りへ声かけられる法善寺 照夫
今日は居ぬ門ものたらねまゝ通り 三司
素通の故障車それでよく走り 獸平
素通りの出来ない雨にして丁び 花村
自轉車の素通り笑ひ／＼ゆき 水客
古本屋まで素通りの往きかへり 紫香
川 雜 三 月
ワイロー社句會(ハワイ)
貯金 貯めてから左傾思想が向を替へ 柳葉
決心の天引三月丈け続き 草一郎
働いて貯めると親父一蹴し 旋風
貯金帳一万弗にまだ遠し 河舟
金借りに行つて貯金の有無きかれ 一牛
これだけは夫も知らぬ貯金帖 柳子
なりふりもかまらず貯金する氣なり 磯朗
愚痴を言ひながら貯金へ手をつける 野山
あれやこれ希望も入れる貯金箱 拜山

貰ひ手はなしせめても金を貯め 快夢起
貯金帖ハンドバッグに持ち歩き 純香
爪に火を燈した貯金置いて死に 芳雨
病幸し貧尙悲し貯金なし 雅一
教育上うちでは貯金にいます 銀水
返済日妻の貯金に手を合せ 潮風
月給の少ない方が金を貯め 紅宿
貯金でも有ればと思ふ花便り 亭駒
貯金なぞせう笑つて二階借 魔花麗
抄らぬ貯金へ残る日を数え 曉舟
年一分知れたらと貯めず居り 我榮多
觀光團加入貯金のおかげだよ 煙波
貯金帖隠し隠して置き忘れ 泉人
遺言に貯金の金を頒けてやり 旭山人
見所のある血洗ひ学資貯め さう女
嵐の夜貯金帖など肌につけ 同雪
若夫婦貯金は坊やの名にしとき 峰雪
出来心ではなく男貯金帖 笑有
品高に日々に貯金が減つて行き 浪人
川 雜 五月十三日 於下関 関 駅
下関支部句會(下関市)
向ひより内のが太い鯉 鯉 不水
十年日妻と喜ぶ鯉 九呂平
薫風へ竿から逃けたような鯉 侃流
出征の鯉で店の日覆ひする 木陽子
瘠せ腕も隣りにまけぬ大鯉 米三
鯉のぼりざれも泳ぎは同じ向き 十郎
鯉轆尻尾ちぎれたまゝ泳ぎ 柳慶
鯉か雨留守をはためく鯉 素人
政界はごうでも俺は浅乗り 不水
庭の松つみつみ政治けなし 九呂平
公約をせした政治家は無日なり 司樓
政治なら委せておけと酔つて 良坊
公約も忘れたように党を去り 九呂平
お頂戴と云へば素直な子供の手 米三
泣くと言う武器に母親困り果て

こども迄三派に分れた選挙戦 良坊
ビクニツク子供供のきめた唄を聞み 牛休門
貧乏はしてゐるけれど子は肥り 柳坊
薫る風こゝから先が俺の村 侃流
おみくじに善男善女氣をなやみ 良太
一灯を獻する信者慎ぶみされ 侃流
戦後派だ踊る神祿街を行く 司樓
信仰の道へはいって死刑待ち 柳慶
その場だけ信者になつて加持祈禱 眞坊
ロザリオの十字架淋し聖者ゆき 良坊
川 雜 四月二十八日 於弘済会ハウス
岡山支部句會(岡山縣)
鯉のぼり・年寄り・暴れる・雨宿
按摩・押賣
鯉のぼり隣の屋根を搔でまわし 茶々
雨上り待つてた様に鯉のぼり 三葉
隣より一尺高い鯉のぼり 十九平
男の子こゝにもありと鯉のぼり 風柳
鯉のぼり如何にも出世しそうなり 方大
末つ子と孫と一緒の鯉のぼり 瀧年
死ぬ話して年寄りは寝てしまひ 久米雄
よく動く年寄り邪魔なものにされ 鉄兒
おみくじは美人の方へヘト暴れ 忠美
胎動は男で欲しいあばれよう 風來子
俄か雨立読み客で混雑し 高良
不遠慮に家のぞき込む雨宿り 三葉
いらつしやいと言われてした雨宿り 茶々
女按摩また前身をたつねられ 九坡
曲り道目あきのように按摩折れ 日出雄
按摩さん枕から先に入つて来 四案
押賣へ主人の下駄を出して置き 忠美
押賣へもうくたびれた顔で買ひ 格一
押賣に買わされた事かくしとき 茶々
押賣へ同情ばかりして憐れし 瀧年

川 雜 四月 於三染宿直室
大牟田支部句會(大牟田)
選挙風景・留守番・思春期・慾・アスピリン
花曇りサノヨイヨイに票乞ひ 溪泉
選挙ゲームトラックマイク印刷屋 正美
得票の予想家内の数も入れ 十時
他の候補へ激励するエチケツト 雅人
一票をかせぎに一里の山を越え 助六
一票の嘆き二人に入れたい氣 曉
留守番の亭主が伸びる日の長さ 川端
押賣へ春で返事をする留守居 柳糸
留守居きた出来ぬ子をつれ趣味の金 千恵子
押賣り留守居を使ふ手もおぼえ 一葉
思春期をかくせぬ乳が高くなり 抱逸
たい違ふにこんな胸のさきめき 青泡
ボケツトへあでて一人で嘆べる肚 水泡
趣味にしてはあんまり大きいピクを提げ 曉
慾ばれば斯く相成れり検門所 鶴堂
アスピリン入れて明日発つ子のカバン 水泡
川 雜 月賦・惡口
小郡支部句會(山口縣)
長野 井蛙報
復員の妻らぬ眼をなつかしめ 丸

小兒科 内科 性病科
安岡醫院
安岡三四郎
道頓堀・日本橋南詰
東へ半丁浜側
電話南⑤三二四六

名産の立賣声も暖れており 逃げられた女の悪口言へもせず 悪口を言ふはご友は憎めない 悪口を言はれるほどの仲の良き 悪口へ痛い処も知つてゐる 悪長を出せと不通の告知板 塵一つ止めぬホームへ時の人 駅長の夢まだ遠きホーム掃き 新世帯月賦拂ひが多くなり

川 司削支部句会 (岡山縣)

五月五日

於 弓削公民館

福島 鉄兒報

事實・あきらめる・春はよし・都 会・派手

ごこまでが事實か彼の立志傳 宿命として事實をも否定せず 妻の日の硬さへ事實云いそびれ 年月が語る事實へまかすなり 事實 もう二巻になつた女秘書 あきらめる子供に親は礼を云い 嫁と云う名故にすべてあきらめる 人様の眞似あきらめる子沢山 諦めてかつらを冠る日がせまり あきらめる筈だつたのに平つちに 諦らめてもう走らない乗り遅れ 春風へベターハーフが若く見え 春はよし母が発起のビクニツク 三男の嫁は都会の風も知り 娘の土産都会の色で配られる 都会から金欠病で戻つてき 羽田から渡来女優が派手に発ち 好み顔に構わぬ柄を撰り 派手かしらは承知で着てゐる娘

岡山縣支部句会 (岡山縣)

四月七日

於 縣廳内世話課寮

服部十九平報 淺はか・ペン・二人連・酒癖・メガホン

百万田当る予算で金を借り 電話ベルも少し云ふペンを置き 記事になる話にペンを握りかえ 感情を殺して書いたペンの跡 ペンネームだけはつく出来ており 居眠りがはつきり判るペンのあと 会つてみる気にもならないペンの跡 二人連遺人毎に振りむかれ アベックがアベックの批判する スクリーンのそで二人の肩より 酒癖を知つての方か心配し 酒癖にこりて女中は近づく 相手になるなと女將眼で合図 赴任より先に酒癖知れており 酒癖を秘書充分に心得る 酒癖が話題にのぼる通夜の席 お隣りの酒癖を聞く向い隣 頑張れメガホン一緒に馳けて行き 制し切れなくてメガホン振り上げる メガホンがなくてさきに本を巻き 代理いつか返答出来ぬはめに 代理いつか返答出来ぬはめに 代理いつか返答出来ぬはめに 代理いつか返答出来ぬはめに

日の丸句会 (鳥取市)

前社長追善大会 於 田中花子居 四月二十三日 河村日満子報

偽はれる心をかくす晴衣裳 偽りをまぎらすための土産買 肩書を選挙の度ひに交へて立ち あゝ悲壯おがみ倒しの選挙戦 選挙場で書きやすい名を書いておき 御協力一点張りの選挙戦

いらくの選挙候補者書き違え あれだけ言つたに候補者の名を忘れ 公然と選別して出る選挙の日 頭張つてくれる夫の肩を採み わが道を往くぞといふ家出する 帯り道忘れず帯るはしご酒 その道は共同募金が立つてるよ マイク持ち道といふ道みな歩き 就業中面会謝絶の下で会い 田市から町への用事頼んどき 田市まで選挙放送呼びかける 田市でも花を咲かせる若夫婦

川柳同好会 (大阪市)

四月二十四日

於 黒木 彈正居

寝息・仲よし・当選 寝息かすかに聞えるような釈迦寝像 安らかな寝息だけ見て医者帯り 満ち足りた男の寝息背中にきく ああ寝息なら大丈夫さといふ見客 子の寝息聞き妻と雨夜長 寝息をば聞いているうちに自分も寝 御見舞は寝息覗いただけで辞し 髪梳かん病児の寝息安らけし このホテル寝息に朝の明けるころ 母親は寝息で熱も知つて居り 仲よしがぼつりくさ欠けて行き 仲よしが互に亭主の愚痴を述べ 人前は仲よしを見せる妻の腕 ラバーかき問はば仲よしと答へ 仲よしの写真女房に制がされる 仲よしが今日もアリバイ作り トラセンヲシユクスと満腹を立て おき 当選のラヂオを母は泣いてきく 始めから当選はせぬ筈で立ち 当選にちと取り過ぎたなと云い 当選は御礼までも人まかせ

阪神ビル小集 (大阪市)

四月二十三日

春夢草報

春の泥選挙のビルへ派手にびび びら張つて角帽ノリをたしかめる びら貼りの肩の破れに西陽さし モクひろいもびらを讀んで日向はこ すい／＼と流れ蛙の望郷詩 親蛙子蛙へびの穴のそば 肥料臭い蛙となつた二三びき

本社七月句会

日時・七月七日(土) 午後六時半

会場・大空文化会館

大阪府南区三休橋南詰東入

兼題・各三句

「総入歯」

「社長」

「作家」

席題・柳語・句評等

会費・五〇円

川柳雑誌社

版写膳田阪

二五町田芝区北市阪大

会商田阪

電話 五六一三 福島 九五一九 番 番 一四



編輯室にて

★独自の立場で独自の内容をもりあげてゆく本誌が、圧倒的好評をうけていることは甚だユカイである。一層の御支授と御愛読をお願いする★本号の表紙は由比種三郎画伯を煩した。東京新宿の街角をうつされたもの★山路閑古氏の小説「將軍娘」はいかにも柳詰らしい異色のある小説として喝采を博していたが、本号で完結した。★東野大八氏の「川柳駭動記」は川柳人の受難記であるが、邪惡に拮抗していよ／＼ふるいたつ柳人魂がうれしい★「川柳と夏の行事を語る」は不朽洞の洞友や会員たちによつて提供された軽い醜物である。愛読を乞う。★「飛燕往來」をふつつして見た。これによつて、その人たちに特に親しみをもちたい。★本号の「不朽洞の喫煙室」は一人々々が少々長すぎたらしいがある。今までのでは豆秋君の「不朽洞のうた」や「旬会」のうた、鮎美君の「春宵愚考」などが面白かつた。幾ら云いたいことを云うページでも他に類を及ばさないものがい。★私が選

動靜

句のために多くの時間を割いているのに同情され、各方面からいよ／＼教示をうけたので、少しづつ善処さして貰うことにする。それで「各地柳境」は当分蔑乃が採録することにした。それと本社句会以外は課題を省略して佳吟だけ採録することにした諒とされたい。★柳人交歓会中廣告は、切を七月三日とする。大至急應募されたい。(路)

▼本社句会
は六月二日
午後六時半

から三休橋の太室文化会館三階廣間で開催▼川維大阪支部句会は六月廿日午後六時から三周年記念として阿倍王子神社で開催▲大阪逓信病院烏ヶ辻川柳会は六月十六日午後二時から講堂で開催▼一路句会は六月十四日午後五時半から高島屋飯田株式会社で開催▼南区医師会文化部川柳同好会は六月十九日午後七時半頃から迷路居で開催▼南海電鉄川柳会は六月廿一日午後五時半から南海高等学校校上で開催▼川維備前支部句会(岡山縣)が五月廿七日に久米雄居で開催された▼廣島川柳会三十周年記念川柳大会が五月五日廣鉄職員会館で開催された▼川柳燈台会(名古屋)が五月十二日に開催された「川柳あかつき」の再発足

である▼休間川柳会(貝塚市)では五月二十六日川維の夜食子、竹莊詩氏を招いて句会を開催▼天王寺焚火のあつまり(大阪市)が六月一日勢火居で開催▼山陽線開通六十周年記念川柳大会(岡山市)が岡山鉄道管理局と川維岡山支部共催で五月廿日第五鉄道寮で盛會裡に開催された▼旭東川柳社創立句会(岡山縣)が六月二日に西大寺町九坡居で開催▼本社主催「川柳と夏の行事を語る」座談会が五月廿日午後六時から川維千日前連絡所で開催された▼長宗白鬼氏(兵庫縣)は五月五日高知へ出張された▼田村藤波氏(岡山縣)は福島縣信夫郡庭坂村福黄館山合資会社飲食所に当分の間滞在される由。▼庄万よし氏夫人ためさん(故安井ひろし令姉)が五月十八日午前一時に大阪市阿倍野区阪南町西一丁目二六の自宅で永眠された行年六十四才謹んで悼む。▼江崎傳氏(東京縣)は六月七日路郎主幹を不朽洞に訪ねられた▼木村千代男氏(食敷市)は夕刊山陽第十七回読者文藝川柳の第一席(賞金千円)に入選された▼五月号二〇頁二段十九行日の「細い雪」を「細い指」に訂正▼六月号一七頁中欄「轉動へ」の句は一字違ひの類句があつたので取消す。



C58型

マツサカパークの汽車は東海道線急行列車の機関車と同型です

一日あそべる

マツサカパーク

松坂屋 屋上



ルビヒサア

この一杯で
元氣
横溢!

社会式株酒麦日朝

最短時間 大阪・名古屋

時間 3 特急

毎日3往復

座席指定金 ¥60

特急料金

上本町發	7.40	12.40	16.40
名古屋發	8.00	13.00	17.00

近畿日本鉄道

Made in Occupied Japan

川柳雜誌

第七号

金三〇〇円

送料(三三〇)

牛ヶ年概算 金一九八円

一ヶ年概算 金三九六円

昭和廿六年 六月廿五日印刷

昭和廿六年 七月一日發行

大阪市住吉區南内代町五丁目二五番地

發行所 川柳雜誌社

大阪市住吉區南内代町五丁目二五番地

電話 住吉 七五〇五〇

募集

課題吟募集

バス(十句) 尼 縁之助選

母(十句) 上田翠光選

手荷物(十句) 大西八歩選

賣店(十句) 大鶴喜由選

近作柳樹雜誌廿句 麻生路郎選

川柳塔(雜詠) 麻生路郎選

文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

「近作柳樹」は一般作家の雅吟を募る。

「課題吟」は何人でも投稿が出来る。

「川柳塔」への投稿は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日發行